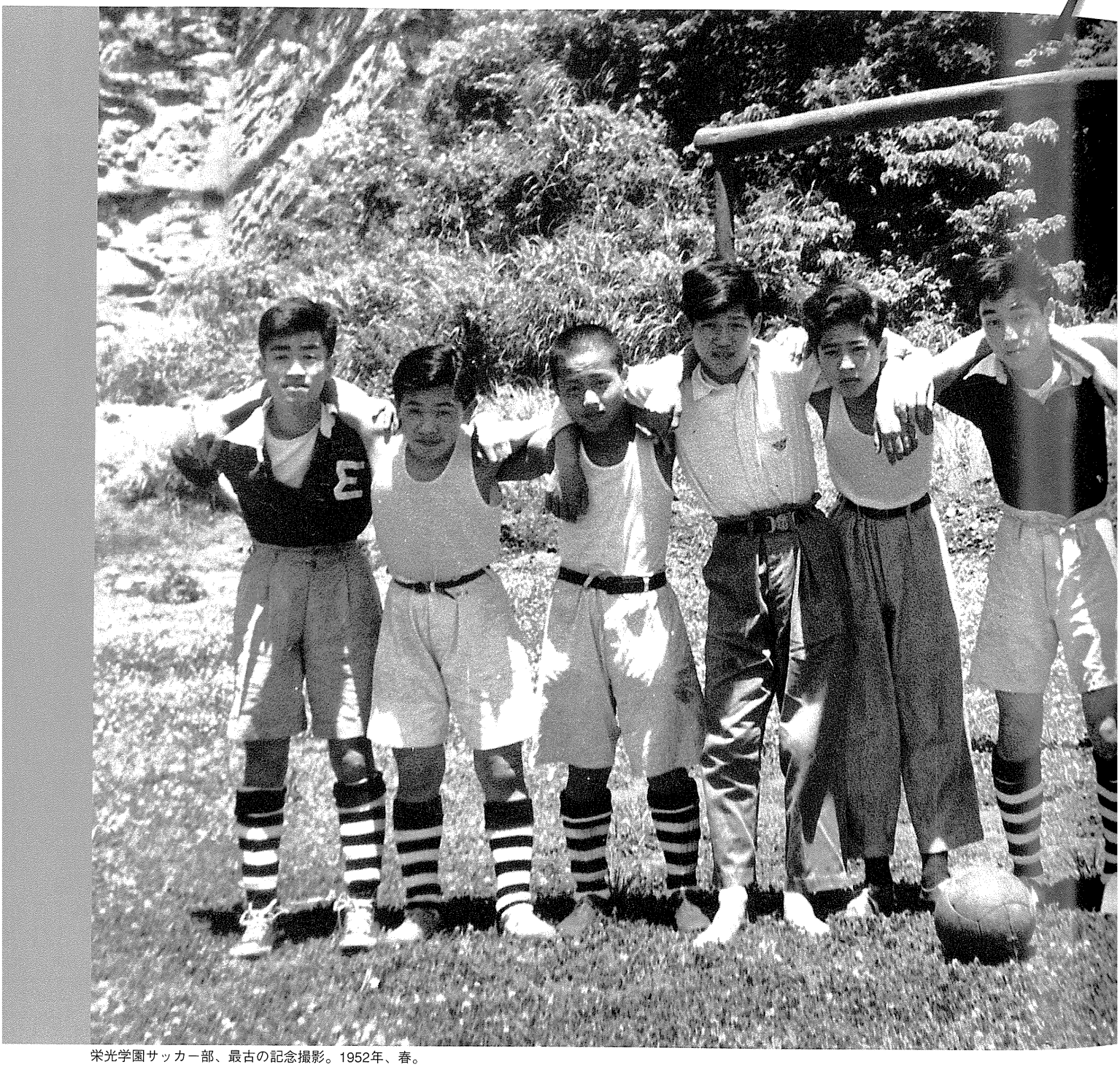
the Family



栄光学園サッカー部、最古の記念撮影。1952年、春。
1期（高3）から6期（中1）までが集合した

# of Soccer

1951~2002

すべてがここから始まった・・・

We are 草創期（1～5期）

土方仕事でグランドづくり。そして山梨県代表を破って全国大会へ

創立時の想い出

稲葉高久（3期）

サッカー部の思い出を、と言われましたが、思い出は後から後から沸いて来ます。

只、残念ながらメモ一つ残しておらず、写真も絶対どこかにある筈ですが、未だ見当たりません。心配は50年前の記憶の不確かさであります。そこで、日時の正確さはご勘弁願って筆をとりました。

部が立ち上がって、最初の障害が部員の募集とグラウンドの確保、そして資金の確保でした。我々3期生が中3の時だったと記憶しております。

当時、野球部は既に存在し、野球のグラウンドは一応整備されて居ました。テニスコート、体育館は有りましたが、サッカーの出来る場所は有りませんでした。当時はサッカーと言っても認知度は低く、グラウンドを校外に求めるのは至難の業でした。グラウンドを校内に（本当に真剣に校外も考えたが、学校の規則で練習時間が3時45分迄と決められた以上、校内で練習するという当たり前の話が当たり前ではない状況だった）求めれば物理的に考えて校舎の敷地と野球のグラウンドの間に存在するハラッパ――そこは身の丈以上に伸びた笹の原野（?）にやたらにコクリートの塊が転がっている空き地しか有りませんでした。

我が部の運営の困難さを、最初に具体的に認識させられたのは、学校に予算がないことでした。公式の場でサッカー部に付けられた予算は、年度末まで3000円。大変ショックを受けた記憶があります。引導を渡された先生が天狗さんだったか、ウルフ神父様だったか良く覚えていません。年度途中とは言え、また幾ら物価の未だ安い時期とは言え、確かボールが2個は買えなかったと記憶しています。横浜の運動具店を走り回っても、サッカーのボールを扱っている店は少なく、値切るなんてとても出来ない相談でした。

間もなくスレイター神父様だったと記憶しますが、水球のゴムボールを調達して貰い、それで練習しました。重くて冬

想い出の One Scene

湘南高校グランド 雪の中の敗戦

飯田喜哉（3期）

その親善試合の当日は、肌寒い曇り空だった。午前九時位に藤沢駅で集合した栄光チームが湘南のグラウンドに着いたときは、冷たい氷雨が降り始めていた。

湘南チームはグラウンド片隅のプレハブ小屋の部室に待機していて、「生憎こんな天気だし、我々は人数が揃っていない。今日はやめにしようじゃありませんか」という。しかし顕原が「今日は我々の一部のメンバーにとっては現役最後の試合になる。何とか相手をしてほしい」と強く言い張ったため、先方は渋々応じることになった。「混成チームで申し訳ありません」といって、先方は中年の監督も助っ人に入っていてユニフォームも不揃い。「やる気がないけれども栄光がそこまでいうのなら」という態度がこれ見えよがしだった。

試合が始まる頃から本格的に牡丹雪が降り出し、一段と寒さが増した。試合は前半0対0だったが、栄光が明らかに押し気味だった。だがハーフタイムを境に情勢は逆転した。濡れたユニフォームが体温を奪い、我々のスタミナは急速に衰えてきた。私自身も何度かゴール前でボールを持ってフリーになるチャンスがあったが、シュートしようとしても腰砕けになりゴールが決まらない。逆に湘南は後半にむしろ勢いを増してきた。結局、混戦の中で先方が押し込んで得た1点で我々の敗北が決まった。

湘南の部室に両チームが引き上げて着替えたが、先方が元気いっぱいなのにこちらは私も含め足を攣らした者が続出で、敗戦のショックも大きく元気なく床にうずくまっている始末であった。先方の「今度はもっと天気が良いときにまたやりましょうや」という慰めの言葉に、栄光チームは湘南の好意を感じつつとぼとぼと帰路についた。

帰りの電車の中で誰かが呟いた。「俺たちは綿のユニフォームなのに、湘南は全員、毛のユニフォームだったじゃないか」――我々ははっと真の敗因に気づいた。当時、栄光チームのユニフォームは各人とも綿の一着しかなかったのである。

1951年の世相

1月　第1回NHK紅白歌合戦放送

3月　第1回アジア競技大会ニューデリーで開催、日本選手団80人

9月　日米安保条約調印

1952年の世相

7月　第15回オリンピックヘルシンキで開催、日本戦後初参加

7月　破壊活動防止法公布

1953年の世相

エベレスト初登頂

12月　わが国初のスーパーマーケット紀ノ国屋、東京青山に開業

12月　奄美大島8年ぶり日本復帰

1954年の世相

3月　ビキニで米国水爆実験、第五福竜丸被災

9月　青函連絡船洞爺丸、転覆W杯第5回スイス大会、西ドイツ優勝

1955年の世相

8月　第一回原水爆禁止世界大会、広島で開催

8月　森永乳業、ヒ素ミルク中毒事件

1952年の相洋戦か？

は足が真っ赤に腫れてきつかった事は今だ忘れません。ブラジルのサッカー少年も貧しく粗末なボールで練習している、とか何とか騙された（？）記憶があります。とにかく練習をしたい一心でした。

それらの思い出の中で、私の一番の思い出はやはりグラウンドの整備です。

ゴールのポストの場所が一つしかなかったと思います。グラウンドの片隅でボールを蹴り、野球部の練習の合間にキャッチャーネットの脇でボールを蹴っているのでは様になりません。サッカー部を結成して、最初の夏休みだったと思います。結局、グラウンドを確保するには、狭くてもゴールポストのある空き地を開墾して使うしかないと決心し、予算なしで、自分達で整備する了解を学校から取りつけました。部員総出で、笹刈りとコンクリートの塊の排除をやったわけです。学校からの支援は、進駐軍から貰った携帯用のスコップ5～6本とグラウンド慣らしの鉄ローラの貸与だけでした。3期生と4期生で土方を炎天下でやりました。

初日、グラウンドに皆な集まり、全員の意志確認をしたのですが、3期生以外は非難ごうごうでした。非難と言っても皆、尤もな話で、これしかないと判ってもサッカーどころか、何時まで土方仕事が続くのか、見込みも判らず、無茶な話でした。しかし、一旦、決まると、本当にみな一致団結して仕事は進みました。

とりわけ4期の泉頭、永島、三田などには頭が下がりました。中でも始める前まで一番生意気で文句の多かった三田が、先頭に立って力仕事をやってくれたのは、今だに忘れません。幾日掛かったかも思い出せない、とにかく小生自身、疑問を感じながらもやり遂げたのを、覚えています。やり遂げたと言っても、練習できるハーフグラウンド分が確保出来たところで早速、練習を始めてしまったと思います。未熟ながら、存分に楽しみました。翌年の校内で行った合宿の楽しかった事は筆で表わせません。

1951～1954年の蹴球部メンバー

1951年			1952年			1953年			1954年		
GK	石井	（中3）	GK	石井	（高1）	GK	矢島	（高2）	GK	矢島	（高3）
										伊藤	（高1）
FB	三田	（中2）	FB	三田	（中3）	FB	三田	（高1）	FB	佐野光	（高2）
	川喜田	（中1）		川喜田	（中2）		川喜田	（中3）		三田	（高2）
HB	佐野頌	（高2）	HB	佐野頌	（高3）	HB	飯田	（高2）	HB	泉頭	（高2）
	泉頭	（中2）		加藤	（高1）		稲葉	（高2）		石川	（高2）
	佐野光	（中2）		飯田	（高1）		泉頭	（高1）		川喜田	（高1）
				泉頭	（中3）		石川	（高1）			
FW	稲葉	（中3）	FW	稲葉	（高1）	FW	荒井	（高2）	FW	頴原	（高3）
	頴原	（中3）		頴原	（高1）		頴原	（高2）		浅羽	（高2）
	岡野	（中3）		岡野	（高1）		小山	（高2）		永島	（高2）
	田辺	（中3）		小山	（高1）		浅羽	（高1）		綱島	（高1）
	浅羽	（中2）		永島	（中3）		佐野光	（高1）		鈴木	（高1）
	永島	（中2）		浅羽	（中3）		永島	（高1）		石田	（高1）
				佐野	（中3）						

栄光サッカー部回顧録

浅羽良弘（4期）

私がサッカー部に入部したのは１９５１年、中学二年生の時だと記憶している。当時、栄光のサッカー部は草創期で、高校生の部員が11名おらず、リーグ戦に参加することも出来なかった時代である。どうにかして11名の選手を揃える為、中学生で体格が良く比較的足の速い者を探すことになり、幸か不幸か４期の私もその一人に選ばれることになった。中２で高校のサッカー部に強引に入部させられたのが、泉頭、佐野、永島、三田、浅羽の６名だったと思う。

当時は戦後の未だ貧しい時代で、ホームグランドはあるにはあったが、雑草が生い茂った野原の中に丸太で作られたゴールポストが寂しく立っているお粗末なものであった。練習をする為にまずは草取りから始まった。ボールも正式なサッカーボールではなく、革ならぬゴム製のものでべこべこしていた。スパイクも革製のものが手に入らず、キャンバスの表にゴム底のもので、直ぐに壊れてしまい修理するのに大変苦労した。

練習は週２日（水、土）の放課後２時間位で、練習内容は基礎体力作りの柔軟体操、ランニング（グランド４周）、ダッシュアンドリターン、ラウンドキック、ドリブル、アタック、２対１、３対２、バックスとフォワードに分かれてのフォーメーション等であった。正式な運動部での練習は初体験だったので初めのうちはかなりきつかった。それでも数ヶ月してまがりなりにもインステップキック、トーキック、サイドキック、ヘディングができるようになった。

リーグ戦に参加することになったが、その前にまず練習試合を横浜の希望が丘高校（昔のサッカーの名門校、神中）の胸を借りて行うことになった。結果は惨憺たるもので、０対11で大敗した。皆、意気消沈してしまったが、やっとボールが蹴れるようになったばかりのほやほやのチームなのだから仕方あるまい。この時の悔しさは今でも思い出に残るが、多分栄光サッカー部の歴史の中で大敗した最悪の試合だったと思う。

その後、練習、試合を重ねるに従い、元々素質の良いものが集まっていたので技量もめきめき上達し、勝てる試合も出てくるようになり、自信もついてきた。練習試合の中でもとりわけ鎌倉学園（当時神奈川県の強剛チーム）との定期的な試合が大変我々に刺激を与えてくれた。いずれ鎌学を倒そうと言う大きな目標が出来、皆練習に励み、サッカーに没頭するようになって行った。

確か１９５３年の頃だと思うが、我々にとって大変うれしいことがあった。学校が新しいグランドを作ってくれると言うのである。当時狭い敷地に野球部、陸上競技部が我々サッカー部と一緒に練習をしていたので、なかなか思うように練習が出来ず、困っていたのを見るに見かねてか、サッカー専用の新しいホームグランドを作ってくれることになった。ローングランドを夢見たが、残念ながら水はけの悪いベアグランドに留まった。しかしゴールポストも正式な規定に合致した角材を使用したものになり、どうにか他校を呼んで練習試合、親睦試合も出来るようになり大変うれしかった。このグランドで湘南高校とのＯＢ戦もやり、当時、小説〝太陽の季節〟で名をあげた石原慎太郎（現都知事）も来て球を蹴ったことがある。その時の記憶では、彼はサッカーの達人とはお世辞にも言えなかったような気がする。

さて、我々がサッカーを始めた時には、日本のサッカーチームは未だ国際的に通用するだけの実力が備わっていなかった。当時西ドイツのオッフェンバッハキッカーズを日本に招待して、日本代表チームとの国際交歓試合が行われ、三田、泉頭、永島、佐野、浅羽の五名で初めて神宮の陸上競技場に本場のサッカーの試合を観戦に行った。孤軍奮闘していた俊足の加納選手（ＬＷ）の活躍と、相手チームのＧＫチンマーマン選手（２㍍近い大男）のゴールキックのもの凄かったことは今でも印象に残っている。

青春時代にサッカーをして来たこと、特にサッカー部草創期の部員として参画したことが、私のその後の人生に少なからず影響があったことは確かである。一つの目標に向かって、チーム全員で一歩一歩頑張ることの大切さ、団体球技ならでは味合うことの出来ないお互いをバックアップし合える有難さ、目標を達成した時の何ともいえない快感を教えてくれたこと、そして良きチームメイトを作ってくれたサッカーに感謝したい。

サッカー専用グランドもできて…

交流随想（遺稿）

永島　暢（4期）

元々は野球少年だったが、肩を痛めたのでサッカー部に中２の時に入部した。グランドも悪く雑草も至るところに生えていたが、それでもサッカーの練習は楽しかった。ボールも悪く楕円形のボールもあったが、ニューボールのときは普通に転がった（当たり前か）。週二回の練習日が待ちどおしかった。ドリブルもパスもシュートも段々上手くなるのが、嬉しかった。ヘッディングは嫌いだった。

高校生になり試合が多くなり、相手高校のグランドへ行くのが楽しみだった。鎌倉学園、湘南高校、小田原高校、希望が丘高校、翠嵐高校、慶応等、当時の強豪校には歯が立たなかった。栄光の強みは中高一貫校だったことで、高校の試合

1954年の夏合宿（3、4、5期）

に中学生のヘルプを頼んだこともあった（5期の川喜田、通称チャーシューはプレイも風貌も十分高校生で通用した）。当時は多くの方々にサッカーを教わった。鎌倉学園の松沢先生、湘南高校の岩淵先生、鎌倉の医者の保本さん、全日本代表の加納さん等、皆さん熱心に教えてくれた。

教わる事も楽しかった。その内、段々勝てるようになり、益々サッカーが面白くなってきた。試合後ラーメンを食べるのが楽しみだった。相洋高校へ試合に行ったとき、相手の選手に「栄光生の芋野郎」と言われた時は、お前達のことじゃないのと思ったが、一言も言い返せなかった。三年生の時も、最後まで試合に出た。南関東決勝戦の神奈川県決勝戦で負けた記憶があるが、相手校もスコアーも覚えていない。

大学生になり、全日本大学選手権で早稲田と関学の決勝戦を見に行ったとき、早稲田のセンターフォワードにかつて対戦した小田原高校の杉本選手がいて、豪快なプレイで大活躍をしていた。ワクワクしながら、応援したのを覚えている。その後縁があり、40数年後小田原高校OBチームと上智大学OBチームで年二、三回交流試合をしている。杉本選手も毎回元気に出場しており、勝ったり、負けたりで楽しい付き合いをしている。

我々が卒業した年に5～7期生の活躍で大阪の大毎戦全国大会に出場した。その応援に四期生、四名（浅羽、三田、泉頭、永島）で大阪珍道中をしたことが、懐かしい思い出になっている。

栄光サッカー部創立30周年で超OB戦に出た時、相手チームは中学2年生だった。その時グランドの全周囲を30代の女性が取り囲んでいるのを見た時は何だろうと思った。前半の半ばまで分からなかったが、中学生の初試合を心配して観戦にきたお母さん方と分かって時代の移り変わりに気がついた。

永島暢君（4期）を悼む

この原稿を書いた僅か2ヶ月後の2001年8月23日、忽然として不帰の客となられました。享年64歳。

ご冥福をお祈り申し上げます。

彼は、他の四期と同様中2でサッカー部に入り、高校生ではFW（インナー）で活躍。高3の夏まで公式試合に出場、脚力、体力、テクニック等あらゆる面で最も優れた選手として活躍した。上智大学に進み、同学の東京大学リーグ2部昇格の立役者となり、キャプテンとしてその重責を全うした。日産火災に入社後も社会人リーグでプレイ、上智大学サッカー部監督も歴任、今年前半迄現役プレイヤーとして、サッカーを楽しまれました。栄光サッカー部の最初の本格的指導者であり、多くの後輩を育てられました。

（4期生泉頭記）

ウルフ先生のお目玉

佐野光雄（4期）

編集子より何か思い出を書くように要請されましたが、この種の場合多くの先輩、同級生が思い出すこと、書きたいこ

とは、殆ど同じような内容になりがちだと思います。

それ程、現在心に残る青春の思い出は共通なものなのでしょう。

そこで、多少私事になりますが、中学二年から大学、社会人（仕事の関係で、アメリカとパナマで現地の仲間とボールを蹴れたことは、私をサッカーに誘っていただいた先輩には感謝しており、サッカーを通して現地の人と仲間になり、多いに楽しみました）と、身体が動くうちはボールを追いかけるきっかけになった出来事を記し、五十周年をお祝いしたいと思います。

＊

当時、授業をさぼり練習をした生徒がいるなど考えられないほど、校則は厳しいものでした。それを、同期の浅羽君とやってしまったので、その後は言葉では言い尽くせないほど大変だった思い出があります。

今は知りませんが、部活動は週二回しか許されておらず、サッカー部の場合、水曜日と土曜日を練習日にあてておりました。

生憎、浅羽君と私は水曜日に選択科目で物理をとっており、その物理の授業だけ外部の先生が講師（お名前は秋山先生といいます）として教えていました。そのため、いつも出欠の点呼はとっておらず、且つ又席も決まっておらず、自由に好きなところで講義が聞ける楽しい授業でした。

その様な状況でしたので、授業をさぼっても、先生には分からないよと、A君を唆し、二人で練習に出てしまいました。丁度県大会の大事な試合の前で、コンビネーションの練習がどうしても必要だったのです。

悪い事はすべきでないですね。その日に限って、物理専門のウルフ先生が、授業を観に来て、二人がいないことがばれてしまったのです。さあ大変です。授業に出ていた同級生は、気分が悪くなったのでは等苦しい説明をしてくれたのですが、練習でグランドにいることがばれてしまいました。さあ二人は大変です。ウルフ先生の部屋に呼ばれ、懇々と説教されました。あれ程怖かったウルフ先生をみたことはありませんでした。偶々浅羽君がAオナスをとっている優等生でしたので、校長の方には廻されず、ウルフ先生の胸のうちに治めてくださり、問題が広がらなかったことには先生に感謝しております。

現在、ウルフ先生はご病気療養中で上石神井の修道院におられますが、私の人生において、サッカーをやるなら徹底的にやれと気合を入れてくださった恩師でもあり、また日々キリストと共に生きることを教えてくださった先生でもあり、さぼった後の先生の部屋での説諭がなかったら、サッカー一筋の道を歩んでおらず、どんな人生を歩んでいたかと考えると先生に感謝する気持ちでいっぱいです。それにつけても、A君には悪い事をしたと、いまでも申し訳ないと思っております。

3期生の送別試合後

想い出の One Scene

栄光中学サッカー部誕生の頃

川喜田暉雄（5期）

私が栄光学園中学に入学してから、しばらくして高校のサッカー部が誕生し、講堂の横のグランドで練習を開始しました。練習と言っても、ただ丸くなってボールを蹴るだけでしたが、それでも十数名が集まって、皆熱心に練習には参加しておりました。他の高校との試合も行われていたようです。中学の方は、未だ部員も十分に集まらず練習だけでした。やがて、我が家に記録が残っていないのですが、初めて他の学校（藤沢一中だったと思うのですが）と試合を致しました。全員が試合経験のない者だけでしたが、とにかく元気にやりました。当時高校の部員が不足していたので、私は高校の試合に駆り出されておりましたが、中学としては初めての、言わば歴史的な試合でした。

その後この試合に出場したメンバーが高校のサッカー部員として1956年度の東日本高校サッカー大会にベスト4まで進出、そして同年の暮れに行われた全国高校選手権大会に神奈川県と山梨県の代表として出場しました（残念ながら私は、高校3年生だったので大会には出場させてもらえませんでした）。とにもかくにもその頃から進学校として有名であった栄光学園にとっては想像もつかない活躍ぶりで、誕生間もない栄光サッカー部にこのような誇らしい歴史もあったのでした。もう五十年も前の話になりますが、今も正月に行われる高校サッカー大会のプログラムには、かつての出場校の名前の一つとして載っています。

ところで、当時のサッカー部員（5期生）のその後ですが、鈴木は外務省に入り、現在はブラジル大使として要職についています。伊藤は福祉関係で活躍しているそうです。綱島は東北大学卒業後、同大で教鞭をとり、現在は山形大学の教授として活躍しています。石田は北海道で新聞記者をして活躍中です。さて当時のチャーシュウ、川喜田は防衛大学卒業後、航空自衛隊に定年まで居りました。

まあまあ、それぞれ、人並み以上の人生を過ごしているようです。

（2001年夏記）

4期生が高2の頃

五期生は草創期と黄金時代を結ぶボランチ

綱島不二雄（5期）

その1　とにかくオヤジだった先輩達

5期生の大半が中学後半からの入部で、草創期を知らない世代である。入部当初からの先輩達は、恐ろしく且つ大人であった。頴原和尚、泉頭野蛮人といった風情であり、他の先輩メンバーも文武両道の大きい存在だった。

5、6期生で組んだ中学生チームは、相当の成績を挙げ少し自信もつけた。GK伊藤、FB鈴木、綱島（メジロ）、CB川喜田（チャーシュー）、FW石田が5期生であった。6期生は文才もあり試合速報では「大黒柱のチャーシューが抜かれ、メジロも勿論抜かれ、どうにか伊藤の好守で……」と言った記事に小さい心を痛めたものである。チャーシューとメジロは、部活を続け、東日本大会での4位の成績を勝ち取った喜びを6期生と共に味わったのである。チームが中学以来のメンバーであり、自信とチームワークが積み重ねられた結果であった。

その2　背番号のないオーダーメイドのユニフォーム

東日本大会出場当初のユニフォームには背番号がなかった。夏の時期なので半袖のユニフォームをと、横須賀の洋品店に頼んで丸首シャツをグリーンに染めてもらい、栄光のネームを貼り付けて参加した。試合に勝ち進んでから背番号のついた長袖のユニフォームを着用と言うのんびりしたものであった。

その3　湘南台の空に響いた校歌

メジロは東郷先生の困惑を尻目に、全国大会の予選出場も強行した。当時の全国大会出場に向け、神奈川県と山梨県の優勝校同士が予選大会の決勝戦を行った。秋の国体では授業優先で出場辞退の憂き目を見たが、全国大会は幸いにして冬休みの為出場を学校が許可してくれた。選手は3校時まで授業を受け、珍しく学校側が用意してくれたタクシーで田浦駅まで行き、決勝戦に挑んだ。サッカーユニホームの上から制服を着て授業を受けていたパワーが皮肉にも存分に発揮され優勝してしまった。この時応援に駆けつけてくれた先生、先輩、在校生の間から自然に校歌が流れ出た。あの時ほど校歌を心こめて歌ったことはない。

その4　全国大会予選余話

全国大会出場は決まったが、卒業を控えているメジロには何故か出場登録がされなかった。メジロは1月に入って担任の先生から大学入試は考えなくてよいと言われ、暫くしてから校長に呼び出されて「原級に留める」と言い渡された。

その時校長曰く、「頭は何の為に付いていますか?」　メジロ応えて曰く、「勿論ヘッディングの為です」　校長すかさず、「でも頭は勉強の為に使ってもいいよ」この時初めて勉強しなければと思った。メジロは卒業式当日まで登校し、当日は在校生の席から同窓生の卒業を見送ると言う「満期落第」を達成した。実にのんびりとした良き時代を過ごしたと言う他ありません。

We are 6期

華やかな戦績の数々。草創期の先輩の苦労を受け継ぎ、最初の黄金期を築いた

青山忠良
荒川治雄
石原　薫
岩田浩一
栗原正喜
小松一郎
佐々木裕行
田沼健二
綱島不二雄
渡名喜守明
中村敬一
中山健治
矢板　肇

花の六期　戦いの記録

石原　薫

私達6期生の高校2年から3年にかけての公式戦、練習試合のほぼ全てを記してみたい。田浦のグラウンドでわずか週2回の練習日を楽しみに過した青春時代を偲ぶよすがとなれば幸いである。

●1956年（昭和31年）

第2回県下高校新人戦（優勝小田原）

2月5日／茅ヶ崎　1―2　●
11日／湘南　0―2　●

練習試合

3月22日／湘南キッカーズ　5―1　○
4月7日／栄光OB　3―1　○
（この試合から高校2年）

リーグ戦

4月22日／茅ヶ崎　5―2　○
5月20日／藤沢　5―0　○
22日／神工　0―0　△
6月2日／希望ヶ丘　2―3　●
9日／関東学院　3―1　○
10日予定／商工　不戦勝　○

リーグ戦結果は4勝1敗1分で2位。1位は4勝2分の希望ヶ丘。

練習試合

4月28日／鎌倉学園　3―1　○
5月13日／川崎　5―0　○
6月17日／栄光OB　3―2　○

東日本大会神奈川代表決定戦

7月14日／商工　1―0　○
15日／神工　2―1　○

このシリーズにはRH或いはLBとして瀬出井紘一君が参加している。結果として慶応、Y校、湘南、栄光が本大会に出場した。

丁度この時期に、これ迄は陸上競技場と野球場と重なっていたサッカーグラウンドがほぼ独立するかたちに改造された。有難いことだったが、その間、数校のグラウンドを借りては練習を続けた。

第五回東日本高校サッカー選手権大会

参加46校で7月31日～8月5日の暑い盛りに、東京後楽園競輪場（現在の東京ドームに有って当時は数少ないローンのサッカー場だった）、東大農学部グラウンドと教育大附属高校グラウンドで開催された。チームは四ッ谷の上智大学キャンパス内に点在していた米軍払下げのカマボコ兵舎に合宿させてもらったのだが、ゲーム以外に余計な体力や神経を使わずに休息が取れた事は大変なプラスだったと思う。

第1回戦　くじ運よく　シード

東大農学部

8月1日／藤岡（群馬）　3―1　○
2日／大泉（東京）　2―1　○

後楽園競輪場

8月3日／浜松西（静岡）　2―1　○
4日／遠野（岩手）　1―1　抽選負

3位決定戦

8月5日／教大附属（東京）　0―3　●

優勝は浦和西（埼玉）。2位　遠野、3位　教大附属、4位　栄光という順位であった。

想い出の One Scene

想い出

田浦のグラウンド……懐かしいなあ。粘土質に石灰の燃えがらが混じったゴール下。あそこでセービングをするのだから、我が栄光のゴールキーパーは華麗だったなあ。3期矢嶋洋昭さん、5期伊藤輝男さん、6期栗原正喜君、7期伊橋俊彦君、9期林吉永君、10期阿部茂君と……これは大した財産だった。

夏ともなればラインのすぐ外には腰のあたりまでビッシリと雑草が生えそろい、バッタが群生していた。練習中に急にいなくなるやつがいる。草の中には何故かバケツに一杯の水があって暫らくするとやけに元気なやつが急に現われる。練習最後のランニングでも忍法ねころびの術で周回数をごまかしたりした。夏といえば56年8月初めの東日本大会も暑かった。矢板君の父上が連日応援に来て下さった。「暑いのに有難とうございます」というと「いやあ、適当にあったかですなあ」。とてもリラックス出来たのを覚えている。

御承知の練習時間である。幸い県下では他校が勝手につまずいてくれたが、県外の相手となるとそうは行かない。仕方がないからポイントゲッターや派手に動くやつにくっついて「そんなところで手を使ってたんでは、おめえの技も伸びねえぞ」とか、20分も続けていると大抵はカッカきて余計な力が入ってしまうようになる。全国大会では、そんなことやるひまもなく走り廻られ蹴り回されてあっという間に試合終了であった。（石原）

1956年の世相

7月　経済白書、「もはや戦後ではない」と宣言
11月　日ソ国交回復
12月　国連総会、日本の国連加盟を全会一致で可決

暁星親善定期戦

9月23日／暁星　2—2　△

全国大会県予選

第1回戦　シード

11月18日／翠嵐　4—0　○

23日／小田原　4—3　○

24日／茅ヶ崎　3—0　○

25日／希望ヶ丘　6—3　○

全国大会西関東地区代表決定戦

12月2日　甲府商業（山梨）

栄光　6（2—2、4—0）2　甲府商業

両校共多数の応援だった。相手は大太鼓を持ち込んでドンドンと打ち鳴らす為、グラウンド内で声を掛け合っても全く聞こえないという初めての体験だったが、アイコンタクトで十分であった。

西関東地区代表として全国大会に出場

練習試合

12月22日／栄光OB　4—2　○

●1957年（昭和32年）

第35回全国高校サッカー選手権大会

第1回戦くじ運よく不戦勝

1月2日、大阪阪急西宮球場にて入場式。翌日の対戦相手である三重・岐阜代表上野商工の試合を観戦した。

1月3日　12時　西宮球場

第1次黄金期

栄光　1（1—2、0—3）5　上野商工

昨日の試合で場慣れしたのか非常に安定してしまった上野商工に対し、体力不足をカバーするすべもない内に完敗した。しかしながらここに至るまでのOB諸兄のバックアップはもとより、在校生のカンパや六甲学院の宿舎御提供・御馳走攻めなどの御支援には部員一同、感謝感激をしたものだった。

練習試合（8期生を含めた7期中心のチーム）

3月26日／小田原　0—2　●

リーグ戦（高校3年）

5月3日／県立鎌倉　6—0　○

12日／吉田島　2—0　○

19日／相洋　0—1　●

上智大学親善試合

6月15日／上智大学　4—2　○

第6回東日本高校サッカー選手権大会

神奈川県予選

第1回戦　くじ運よく　シード

7月14日／小田原　1—1　抽選勝

15日／藤沢　5—0　○

16日／希望ヶ丘　8—0　○

鎌倉学園、翠嵐、栄光が県代表に。

練習試合

7月27日／鎌倉学園　5—0　○

第6回東日本高校サッカー選手権大会

?／暁星　2—3　●

この後、秋のリーグ戦にも6期生若干名が現役として頑張ってくれたのだが、小生の試合記録はここで終了している。

We are 7期

英書を貪り読んで練習計画を練り、『DASH』を創刊した進取の精神

青木盛邦（FW）
生駒直樹（FW）
伊橋憲彦（GK）
小山　弘（HB）
奥田斐規（FB）
金澤　洋（FW）
栗田秀樹（FW）
小野民雄（HB）
篠塚俊夫（HB）
瀬出井紘一（HB）
東郷　武（FW）

我らラッキー・セブン「幸せな時代」の七期

奥田　斐規

我ら七期は昭和二十八年（一九五三年）栄光学園が最初の卒業生を送りだした年に入学、サッカー部、いや正確には「蹴球部」に入部した。

いま街で若者をつかまえて「蹴球」の二文字を見せたら正解率は相当に低いと思われるが、当時はサッカーより蹴球の方がどちらかと言えば一般的だった。

なにせほぼ半世紀前。大卒の初任給が八千円。練習の後の楽しみに購買部（これも古めかしい名称だ）で買っておくジャムパン、あんぱんの類が一個十円、牛乳一本十五円という時代。我々がプレーしていたのは言うなれば「蹴球」であって、今日のサッカーとはいささか異なっていたように思える。

まずボールからして、これは今のものとはまったくと言っていいほど違った。きちんと足の形にはなっていない安物の靴の敷皮のような皮をはりあわせた中に赤いゴムのチューブが入っており、これに空気を入れて靴のように一か所で紐で締める。ヘディングの時にこの「靴紐」部分が当たると格段に痛く、試合では仕方がないとして、練習では「ひもをよけろ」と苦心したものだ。

チームも、言うなれば完全分業制。前五人がフォワード。センターを中心にその左右にインナー、その外の両サイドにウイング。フォワードの後ろにハーフバックが三人。その後ろにフルバック二人がいて、ゴールキーパー。役割分担ははっきりしており、フルバックが敵陣に入る場面はまずなかった。

当時サッカーはあまり陽の当たらないスポーツで、競技人口も少なく、我々が中一の時（昭和二十八年）の試合数は僅か十。ちなみに、成績は三勝二敗五引き分けで湘南地区大会第三位と記録にある。我々が高校の主力（高二）となった昭和三十二年でも、神奈川県の国体予選の出場校は二十を数えるに過ぎない。

今日のように、国立競技場（毎年正月の全国高校サッカー選手権大会）が甲子園（夏の高校野球）に勝るとも劣らない人気で、ギャル達の応援も盛んな状況とは大違い。サッカーの試合を観にくる女の子は、余程のもの好きか、ぞっこんの彼が出場しているか、というところだが、当時はそもそもモテモテの輩がするスポーツでもなかった。

という次第で、県下のトーナメントでは三～五戦勝てば優勝。栄光のように練習時間が厳しく制限されていても、頭を使って（ヘディングだけではなく頭脳を）チームワークのよいイレブンは、昭和三十年代に入って、神奈川県では中学も高校も常勝を誇るようになった。

ボールは継ぎ接ぎだらけ。グランドは砂利だらけ。皮のスパイクを持っている者の方が少ない。練習方法もまだまだ数少ない先輩たちが編み出したものに自分

1957年の世相

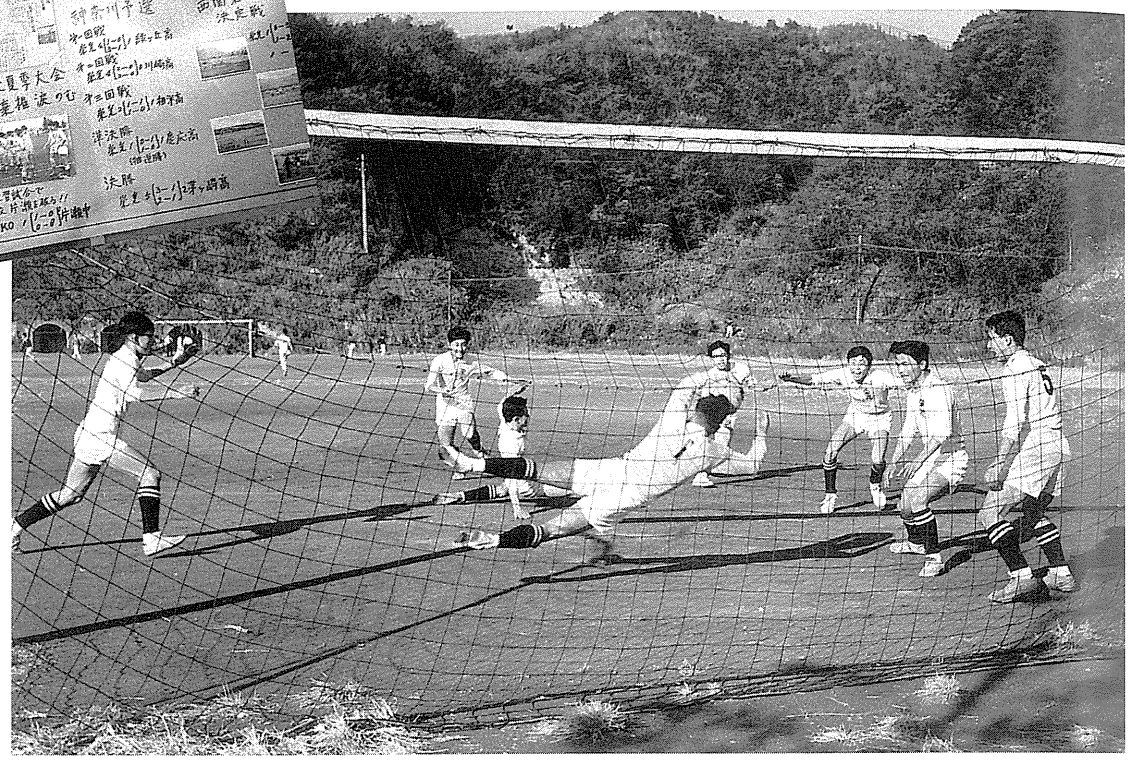
10月　ソ連、人工衛星スプートニク1号打上げ成功
12月　カラーテレビの実験放送開始

想い出のOne Scene

DASH創刊の多彩な面々

「アオキ」こと青木盛邦＝背が高いので、センターフォワードを務めることが多かったが時にキーパーも。
「ウマ」こと生駒直樹＝名の通り生きのいい暴れ駒で、主にインナーとして走り回り還暦過ぎても現役プレーヤー。
「イッパチ」こと伊橋憲彦＝ジャンプ力より体の幅でボールを止めてやろうというタイプのゴールキーパー。
「ガーチャン」こと小川弘＝ハーフかフルバック。長身でヘディングに強い。サブキャプテン。
「オク」こと奥田斐規＝フルバック。分業時代で対外試合で得点したことなし。ダッシュの初代編集長。
「キンタク」こと金澤洋＝バックスもフォワード（インナー）もこなす万能選手。バイオリンも名手。
「クリ」こと栗田秀樹＝静かに燃えるフォワード。派手ではないが頼りになるポイントゲッター。
「タミオ」こと小野民雄＝研究熱心なキャプテン。センターハーフとして文字通りチームの要。
「オデン」こと篠塚俊夫＝蔦の親分的体躯と顔つきでたいがいの相手のタックルをはねかえすハーフ。
「ダボ」こと瀬出井紘一＝ずんぐり大柄で、相手にぶつかって行く走りは迫力十分のディフェンス。
「トーゴ」こと東郷武＝当時の部長、東郷寛先生の弟。極めてスマートというか要領よくゴールを狙うフォワード。

部室の壁新聞。32年度の県大会優勝とＤＡＳＨ創刊を報ずる



昭和32年の秋（推定）、快晴の田浦グランド。コンビネーションの練習に夢中のわがイレブン

達の工夫を加えて試行錯誤。我が期のキャプテン「タミオ」（小野＝旧姓佐々木＝民雄）は、授業中もしばしば、どこからか入手したサッカーのフォーメーションの英書などを貪り読んで、その日の放課後の練習計画を練っていたものだ。

今にして思えば「哀れな時代」。でも先輩たちの情熱に引っ張られ「栄光サッカー」は短期間の中に着実に力をつけた。我ら七期が中三の時の戦績は、十一勝二敗一分けで、夏季県大会準優勝、冬季大会で優勝。そして高校一年となった昭和三十一年、栄えある全国高校サッカー選手権大会への出場権を得た。当時はいまと違って、神奈川県で優勝しても山梨の優勝校と「西関東代表」を争い、これに勝ってはじめて全国大会に出られるという制度になっていた。

代表決定戦の相手は甲府商業。山梨はレベルが高く、試合前の予想は「栄光劣勢」であったが、実際は前半二対二、後半四対〇で快勝し、昭和三十二年の正月を大阪で過ごすこととなった。当時大会は関西で開催されており、栄光の試合は（相手は三重県の上野商工）西宮球場。野球場だから、マウンドがそのままあるという、今では考えられない状況だった。

この年のチームは六期生が主体だが、七期からも常時四～五人が公式戦に出ていた。夏の「東日本高校選手権」でも準決勝まで勝ち進み、抽選負けで決勝進出を逃すという強いチームだった。

翌三十二年度は、七期と八期の連合軍で再度全国大会にチャレンジ。県大会は見事に連覇したものの、代表決定戦で山梨の韮崎高校に敗れ、連続出場は果たせなかった。

一方、我が七期は（たまたまそういう時期に巡り合わせたのであろう）部の雑誌『ダッシュ』を創刊させた。散逸してしまいかねない部の記録を残そうということで、第一号は昭和三十二年三月一日発行。発行所は「栄光学園蹴球部」となっている。

いまの若者にとっては「なに、それ？」という感じの「ガリ版刷り」で、なんとも稚拙。それでも、創刊号が刷り上がって来た時、部長の東郷先生は「思っていたよりはるかに良くできている」とフォス校長のところへ見せに行こうと連れていかれた。校長室に行くと「良くできたね。これはいいが、サッカー部は練習終了時間をちゃんと守りなさい」の笑いながらのお説教だった。

木曜と土曜の放課後、それも確か午後五時までと決められていた練習時間。日の短い冬はともかく、夏はついつい時間を忘れてやっていると、天狗さんが自転車でやってきて、機嫌がいいと暫くニコニコ見ておられるが、そうでないと「直ぐに止めなさい。今度また時間オーバーしたら練習停止だよ」。

「辛い練習、早く終われ」と思いながら、それでいて「出来るならもっと続けたいのに」と思う、そんなサッカーの魅力に取りつかれた我々。栄光サッカー部で培われた体力、精神力、あるいは友人・先輩・後輩関係がいかに貴重であるか、それぞれに折りに触れて噛みしめているはずだ。

We are 8期

天狗サンには「末広がりの期」と予言されたけど……

阿部行朗
天野芳文
井街　元
宇佐美　淳
内海　晟
漆山浩一
岡田文夫
遠藤　力
勝山吉久
加藤陸男
河相　董
佐伯修三
佐久間　巌
佐藤研二
塩谷晋策
長嶺敏明
林　　敏
目黒克英
山井一夫
山崎康年

雑感

宇佐美　淳

我々八期は、天狗から「末広がりで将来が楽しみだ」などとおだてられて入学したが、今や二〇〇一年が還暦（早生まれは二〇〇二年）。

「人生六十年の昔とは違うぞ」と抗弁しつつも、髪が後退し、腹が出て、孫が可愛いと思う歳になると、過去の苦い失敗経験はきれいさっぱり忘却の河に放り投げ、心地よい思い出だけを過剰に美化し、山と積み上げ、果ては吹聴して廻る愚を犯すことにもなりかねない。

自戒しつつも、愚を犯すことも顧みず当時を振り返ってみる。

華麗なる中学時代

何も知らずに入部し、例の如くサイドキックから始まり、インフロントキック、ヘッディング等々やらされたが、今から思えばただボールとじゃれていただけ。

当時の指導学年が何期かは知らぬが、あまり教えてもらったという記憶がない。その代わり指導学年でない「泉頭さん」には非常に良く教えて頂いた。

皆も慕い、図にのって休みの日には北鎌倉のお宅まで押しかけ、飯を食って帰る始末。

今から思えば、個々人の技術レベルを掴んでいて、進歩が見られると誉め、次の目標を与えるというやり方が皆を夢中にさせたのかもしれない。

そんなこんなで三年生になったら快進撃。殆ど負けた記憶がない。多分、二十連勝以上したのではないか。

ある大会で六角橋中に勝ち、その年から文部省により認められた他県での大会（大宮か？）の参加資格を得たが、例によって例の如く、学校側の頑なな判断から参加できず、東郷先生が協会からお小言を頂いたと聞いている。

もう一つ忘れることのできないことは「ヤヤ（林敏君）」のこと。

不幸にして一緒に卒業することはできなかったが、センターフォワードで、ボールを持たせたらなかなか捕まらない。

まさに「華麗」であり、この名ポイントゲッターに何度助けられたか知れない。

尻すぼみの高校時代

この八期のチームが高校生になったら、どんなに素晴らしいチームになるであろうという周囲の期待にもかかわらず、高校生になるとグラウンド（今はピッチと言わないとサッカー通とは言われないらしい）に出てくる数も少なくなり、個人個人は一所懸命やっているのだけれど、何となくまとまりに欠けるチーム状態になってきた。大学生になっても練習に駆けつけて頂いた「篤さん」には今もって申し訳なく思う。

六期が全国大会に出場し、七期八期連合軍が県代表となり韮崎高校と全国大会（南関東代表）出場をかけて戦ったのに反し（敗戦）、八期九期連合軍は県大会の

想い出のOne Scene

19連勝

兎に角強かった。中学時代の8期生チームは当たるところ敵なしだった。やはり試合に勝っていると、サッカーそのものもますます面白くなる。我々の中学時代は、我々にとっても中高を通じての黄金時代だった。

昭和31年の夏季県大会は無論優勝、そのあと練習試合ではあったが何と中学生ながら湘南高校に2―2で引き分けるなど、引き分けを挟んでではあったが連勝街道を突っ走った。

記憶では宇佐美君のいうように20連勝以上はしたつもりでいたが、この原稿を書くにあたって「DASH」を確認したら、19連勝と記録されていた。

ところで、肝心の思い出のシーンは、この連勝記録が途切れた時である。昭和32年2月、冬季県大会の準決勝・決勝の日。

あの藤沢県営球場へ集まった栄光チームは10名。大会委員からの連絡不手際で、栄光に試合日の連絡がなかったため、それが判ってから急遽各部員に連絡をとるも、これしか集められなかったのだ。

折りからの雪模様の天気の中、準決勝は10人で死力を尽くした。

1958年の世相

11月　皇太子明仁殿下と正田美智子さんとの婚約発表
12月　東京タワー完成
12月　1万円札発行
W杯第6回スウェーデン大会、ブラジル優勝

中学夏季大会で優勝した８期イレブン

決勝か準決勝で負けたと記憶している。

何故このような状態になったのかは、いろいろ考えても今もって解らない。我々八期にとって、ことサッカーに関しては天狗の言った「末広がり」よりむしろ「尻すぼみ」だったのかも知れない。

このようにして栄光でのサッカー生活は終わり、大学に行っても続ける者、今でもボールを蹴りつづけている者、サッカーとは表面的には無縁となった者等いるけれど、フォワードであればボレーシュートでネットを揺るがした時の足の甲の感触、バックスであればスライディングして相手からボールを奪った時の快感等、未だに体の一部にその感触が残っている。

最後に、一緒にプレーした時間の長短の差はあれ、一時期ボールを共に追いかけた仲間のうち、一足先に鬼籍に入られた山井、岡田、佐伯、三君のご冥福をお祈りする。

合掌

エピソード3

井街　元

今年で還暦を迎え、大昔のサッカー部生活のエピソードをいくつか思いつくままご紹介したいと思います。

＊

（その1）中三のたぶん三学期だと思うが、どの程度の規模かは忘れましたが、全勝を続ける我がチームは、東京後楽園で開催される蹴球祭に招待されたのですが、皆の成績が芳しくないとの理由で、東郷部長が辞退するとの判断をされ、出場できなくなり、全員地団駄を踏んで悔しがったこと。

＊

（その2）高校インターハイ南関東代表地区予選でのことですが、韮崎高校との対戦となり、甲府へ遠征したときの話。

甲府市内の旅館に宿泊し、皆で風呂に入ろうと風呂場に向かったところ、風呂場からザバヤ先生が、まっかな顔をしてきて、

「みんな、今は風呂に入るな、もどりなさい！」

何のことだかわからないまま部屋に戻ったのですが、そのわけは……。当時甲府市内の旅館では、混浴もあり、それを知らずにザバヤ先生が入ってしまったためでした。入っていただご婦人も、赤ら顔の大男がはいってきてさぞかし驚いたことでしょう。

＊

（その3）先輩の愛情ある鬼のようなきついご指導で感じたこと。

泉頭さん、頴原さんのお二人、特に泉頭さんは、卒業後も栄光のグランドに来られ、時には鬼のように我々をご指導いただきました。今振り返ると、青春真っ只中の大学生活において、授業のないときはほとんど栄光のグランドで、女性には目もくれず、我々のお相手をしてくださったこと、涙が出るほど感謝申し上げないと、罰があたるようなー。

We are 9期

ユース代表を輩出し、「栄光サッカー」団結の精神的支柱を築いた

飯田則幸
石原　博
内山正樹
大泉雄司
大前芳蔵
菅澤俊典
田代和生
田畑哲也
（1995年1月逝去）
月野茂樹
（旧姓　佐藤）
中山泰司
林　吉永
山田誠一

「石原と田畑」

内山正樹

主将・石原、副主将・田畑を中心とした我が9期は、戦績的には中3夏季県大会の決勝棄権（決勝の日程が平日に変更されたため）、冬季県大会決勝戦敗退、高1インターハイ予選敗退、高2インターハイ予選決勝敗退と、あと一歩のところで県大会での優勝経験がない。しかしながら、トクさん（4期の泉頭先輩）に中2の後半から指導を受け、強い8期の影に隠れた「弱い」9期は、冬から夏にかけての猛練習に耐え、学校の許可が出ずに涙を飲んで決勝戦を棄権した相手の片瀬中学校に練習試合で勝ち、実質的県下No.1になる過程で、決勝まで進出できる力をつけると同時に、まとまりの良さではどの期にも負けない期となった。

9期の中心はやはり主将・石原、副主将・田畑の二人だった。石原のキック力は中1の頃から群を抜いていた。石原は高3になってもチームに残り、関東大会や全国大会で活躍し、当時ユースの監督であった岡野俊一郎氏に見込まれ、全日本ユースの代表選手に選ばれた。残念ながら練習中に膝を痛め、全日本ユースの試合には出場できなかったが、仲間の一人がユース代表に選ばれたことは9期の誇りであった。

他方、ファイター田畑は猪突猛進・スライディングタックルを得意とするセンターハーフ（今で言うスイーパー）として活躍すると同時に、強靭な精神力を持った精神的支柱であった。当時（現在でもそうかも知れないが）、運動部としては希有であった機関紙DASHの主要な原稿（檄文に近かった）は、トクさんと田畑が書いていたような気がする。

9期の現役活動の中で特筆すべきことに、高2の創立記念祭（1959年6月）にサッカー部として運動部唯一の展示参加をしたことがあげられる。沈滞している栄光のクラブ活動に活を入れるという意図で、「サッカー部七年の歩み」を展示した。運動部で唯一全国レベルの戦績を残し、県のトップレベルにあるという自負の下での参加であったが、展示のリード文を以下に紹介し、当時の熱い思いを伝えたい。

「無いものに対する憧憬と情熱、それを得ようとする意志を持たない者は死者に等しく、死者の周囲は不可能の壁である。」

また、第5号を発刊したサッカー部機関紙『DASH』には、次のような一文がある。

「サッカー部の真髄／それは若々しさなのだ。苦しくても辛くても真の勝利を目指して突進する。そこに厳しい練習と大きな充実感と深い友情が生まれる。サッカー部の背骨、創立の頃から中2の十二期生に至るまで通っている背骨、それが若々しさなのである。毎週2回の練習日で毎週3倍近い練習量を持つ他校と戦

1959年の世相

1月　キューバ革命
4月　皇太子明仁殿下ご成婚
9月　伊勢湾台風、中部地方に大被害

想い出のOne Scene

青々とした坊主頭

大泉　雄司

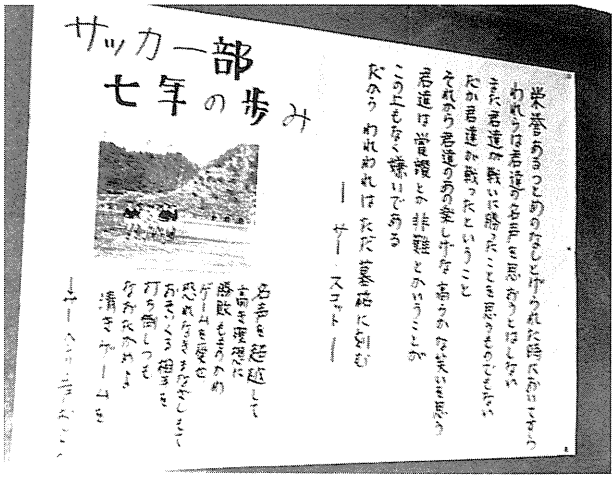
高校2年生の関東大会予選のことだったと思います。当時は鎌倉学園が全盛期で前年も全国高校サッカー大会の県決勝戦で0―1で敗れました。しかし、県で優勝は出来なかったものの、栄光サッカーは常にベスト3には位置していたと思います。

さて、国体予選の相手は慶応高校で、勝てば甲府の大会に出場。楽勝出来ると全員が思っており、誰かがもし負けたら坊主になろうなどといとも簡単に約束してしまいました。試合は初めから栄光が押しっぱなしで、やはり楽勝ムード。

しかし、シュートを何本打っても得点にならず、ゴールバーを叩いたり、ポストに当たって跳ね返ったり……ボール支配率は90%以上。それでもハーフタイムには誰も負けるとは思っていませんでした。後半も相変わらず押していたが得点に至らず。ゴールキーパー以外は全員が相手サイドでプレーしていましたが、1回だけ逆襲をくらい1点を許してしまい、そのままタイムアップ。

約束通り藤沢駅近くの床屋に行って丸坊主になったが、青々しい坊主頭にお互いに顔を見ては大笑い。翌日学校に行くと、良くやったと言う先生もいれば、苦々しく見る先生もいるなど様々な反響でした。それ以降は下手な約束はしませんでした。

まとまりの良さではどの期にも負けない



創立記念祭に運動部で唯一の展示参加

神奈川県四十雀（しじゅうから）リーグでも道を拓いた（6期2名、9期4名、10期3名）

って勝利を得るには、練習を大事にしなければならない。烈しい練習はそこから生ずる。そして少ない練習で他校に勝たねばならない。そこに練習・試合における若々しいすさまじいファイトが生ずるのだ。これがサッカー部の生命であり、これがサッカー部の歴史である。堅く結ばれた団結と烈しい練習によって蹴球部は前進する。若々しき若人の集う所、真の若人の集う所、われらの蹴球部を紹介しよう。」

まとまりの良い9期はサッカー以外でも、現役の頃は仲間の家へ、また丹沢の栄光ヒュッテへと団体で行動した。

卒業後も大学ノートを回して近況を伝え合い、飲み会を開けば地方在住者以外は殆どが出席した。OB会の試合、総会への出席率は恐らく各期の中で一、二を争うのではないだろうか。

このまとまりの良さが最高に発揮される事件が、卒業後32年経った時に起きた。「田畑がガンと闘っている」――この知らせが伝わった時、仲間として田畑のために何が出来るかを話し合い、全員で手分けして9期同期生及びサッカー部OBを対象にカンパ活動を実施した。そして、多くの関係者を感動させるメッセージを残して平成7年1月に闘いを終えた後に、追悼・遺稿集を発刊することになった。この田畑の闘いに対する仲間の取り組みはまとまりの中心にいた田畑に対する必然の行動であった。

もう一人の中心である石原は、我が9期の代表としてOB会会長を仰せつかっている。

We are 10期

もう四十年も前から、今日の日本のサッカーの隆盛を予見していた十期のイレブン

阿部　茂（ＧＫ）
新井洸二（ＭＦ）
市村俊一（ＦＷ）
大石一之（ＤＦ）
大久保幸作（ＤＦ）
太田　茂（ＭＦ）
小沢　進（ＦＷ）
木下哲朗（ＦＷ）
近藤邦照（ＦＷ）
佐藤晃一（ＦＷ）
清水征四郎（ＤＦ）
唯野英輝（ＧＫ）
冨野暉一郎（ＭＦ）
中前　峻（ＦＷ）
林　　茂（ＤＦ）
町田晶生（ＤＦ）
松田京司（ＦＷ）
宮杉　武（ＦＷ）
矢島守治（ＤＦ）

中三万歳

（『ＤＡＳＨ』５号より）

松田京司

我がサッカー部に於いて我々中三の占める地位は相当なものである。数が多い上に個人個人の質が優れている。その中三が、部内の品位と教養の向上に大いに貢献していると言う事は否定する事の出来ない事実である。そこでこれから、先輩諸兄又、中一中二の可愛い弟共にその優秀なる顔ぶれと、練習前の一シーンを紹介しよう。

午後一時半、冬とは思えない程の暖かい日光がサンサンとふりそそいでいます。昼のお弁当を食べたばかりで、非常に眠気を催すその頃、グランドの片隅では、何やら奇声が聞こえてきます。どうやら、市村、町田、林、清水、唯野の悪童連の声らしいです。守ちゃん（矢島）に歌を歌わせようと、一生懸命です。ところが守ちゃんもオイソレとは歌いません。市村、町田「最初のところだけ歌ってくれれば後はわかっているんだ。」林（アイナメのような口でニタッ）清水「出だしのところだよ。」守ちゃん「ワレハフクロウ、タノシキ…」一同笑いをこらえて、唯野「それから後何だっけ。」守ちゃん「ツトメハタシ、ココロサヤカ…」どうやらうまくいった様子です。

ゴール前では、残りの連中がサカンに、ボールを足に当てようと空しい努力を続けています。大石が素晴らしいスピードでボールにつまずきながらドリブルをしています。大久保が飛び出しました。二人はぶつかりました。ボールはコロコロと木下の足下へ、木下「いくぞ。」阿部がかまえました。木下シュート。ボールは見事ゴールをよけて、ユーカリの木にぶつかりました。木下「オレヤダナ」阿部「トロイヨ」木下「ナニオ」二人はガップリ組み合いました。サッカーならぬ相撲で勝負を決しようというのです。そこへ太田が飛んで出て、二人のオシリをピシャピシャたたきました。他の皆も、太田にならってサットウしました。こうなったら誰をたたいているのか、誰にたたかれているのかわかりません。下になった者は災難です。宮杉がつぶれてしまいました。大久保は例のＬＰのレコードを78回転でかけた様な超早口でしゃべっています。「イテエナ」という言葉がやっと分かりました。こうなると、いつも要領の悪いのは冨野です。一番やられて、一人もぶてない有様です。それでいて性こりもなくやって来るんですから。大石が下の方でクシャミ一発、近藤がそれを横目でジロリ。彼の目つきは百万ドルです。あの目で見られると、思わず財布の所在を確かめたくなるほどです。中前が起き上がってニヒルな表情で言いました。「ドンダラネ、コノタイド。」彼は東北弁のエキスパートです。なにしろ東北人よりうまいんですから。

皆が、やっと起き上がってフウフウ言っている時、向こうから佐藤がかけて来ました。といいたいのですが、ユックリ、

想い出のOne Scene

ＰＫ

市村俊一

試合の経過はほとんど覚えていない。ただ大事な試合でＰＫを失敗したシーンだけが脳裡に焼きついている。記録によればそれは1960年11月23日であった。

その年、高二の10期が主力の栄光は春から好調であった。練習試合は全勝し関東大会を兼ねた県大会ではトーナメント五戦をすべて勝ち抜き見事優勝。水戸で開かれた関東大会では日川高（山梨）大泉高（東京）を連破、三回戦で名門浦和西高に敗れるまでは連戦連勝であった。

秋は目標を全国大会出場に絞り猛練習を重ねて予選に臨んだ。一、二回戦を順調に勝ち進み三回戦の相手は強豪鎌倉学園、これを破れば代表の切符がぐんと近づく。そのプレッシャーかあるいはどこかに油断があったか、得意のショートパスが思うように回らず苦しい試合展開となった。劣勢の中で拾った虎の子のＰＫ。右ポスト下を慎重に狙って蹴ったボールはキッカーの意図に反してキーパーの真正面ストライク。気落ちした栄光と勢いづく鎌学、試合の流れは完全に相手に傾き、終わってみれば２対０の完敗。県内無敵を誇った10期サッカー部の試合は実にあっけなく終わった。張りつめていた気持ちも切れ、帰りの足は鉛のように重く、自分のＰＫ失敗で負けたという自責の念とショックでしばらく魂のぬけたような状態であった。

1960年の世相

５月24日　チリ地震津波で田浦の栄光の岸壁の水位が異常に上がったり下がったりした

ダッコちゃん人形大流行

10月12日　浅沼社会党委員長刺殺

12月27日　政府、国民所得倍増計画を決定

ユックリ歩いて来ました。彼は遅いのです。何から何まで。早いのはごはんを食べる事だけです。小沢が小声で歌っています。耳をすませてお聞きなさい、『港町十三番地』です。彼は歌謡曲を歌わせたら一番です。ヴィクターから専属をすすめられたのですが、彼の偉大なる教養がじゃまをして、それは断ったそうです。グラウンドの外では、新井がマスクをして寂しそうに立っています。そうでしょう、楽しい練習が出来ないのですから。彼は、十二月以来カゼの引きっぱなしで、いつまで続くかわからないそうです。

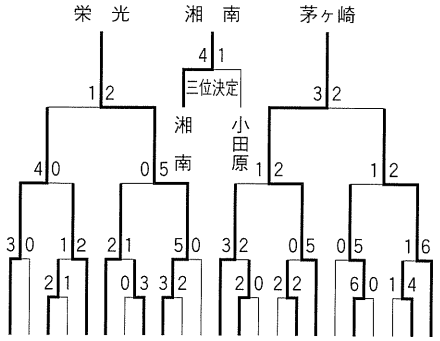
又、太田と宮杉が何か言い合っています。太田が宮杉のオナカが出っ張っていると言ったのが原因のようです。皆は二人が組み合わないかと見ています。そこへ田畑さんが来ました。「ピー、中三練習始めよう。」皆はシブシブ丸くなって体操を始めました。

彼等は皆、良い若者です。将来の日本いや世界にとって重要な人物となるでしょう。元気一杯、大声を出してかけて行きます。

さて皆さん、一人足りないと思いませんか。そうです。松田がいません。どうしたんでしょう。ナニナニ、彼はウルチ大明神に呼ばれて地下室の掃除をさせられていますって。ああキット又、イタズラをしでかしたんでしょう。

10期中三時代

関東大会県予選



主な戦績

10期中学の主な成績1958年（昭和33年）

夏期県大会決勝	藤沢一中	0—2	●
冬季県大会決勝	白山中	1—0	○

中学全成績　10戦９勝（含１不戦勝）１敗
勝率９割

高校の主な成績1960年（昭和35年）

関東大会出場決定戦	湘南	2—1	○
県王座決定戦	希望ヶ丘	3—2	○
関東大会準々決勝	浦和西	0—3	●
全国大会県予三回戦	鎌倉学園	0—2	●

高校全成績　25戦21勝（含２不戦勝）４敗
勝率８割４分

We are 11期

野蛮で大らかで……「輝かしい一戦」も経験した部生活

北島富治
小島四朗
鈴木荘一
田島卓也
宮坂研一

中3初試合

宮坂研一

その日、もう四十数年も前の初夏のある土曜日、高校生は公式戦か何かで出掛けていて留守だった。普段、私たちのコーチをしてくれる親愛なる哲ちゃんこと田畑先輩も試合にお出かけで、確か、私たちの面倒を見てくださったのは十期の松田さんだったように記憶している。

弱い、まとまらない、下手と言われつづけてきた私たちだったが、その日は栄光学園中学校サッカー部の主力チームとしてのデビュー戦で、つまり初試合だった。しかも相手は、県下一の強豪として名高い片瀬中学であった。試合結果について先輩方の期待の度合いは当然低かったものと想像される。

それは公式戦ではなく、練習試合だった。田浦のだだっ広い、そして小石や細かいコンクリート片などがいっぱい混じったグランドは雨でグチャグチャになっており、あちこちに大きな水たまりができていた。

試合開始のホイッスルが吹き鳴らされ、いよいよ私たちの初試合が始まった。覚えていることは、夢中で戦ったこと、必死に走り回ったこと、これまでにない程の奮戦ぶりであったことである。

混戦の中で足を出すとボールの方から私の足に吸いついてくるような感じで、簡単にボールが自分のものになる。スライディングアタックをかけると、上半身まで横になって泥の中を滑り、胸まで泥水の波が駆け上がっていった。そして足元にはボールが……。

敵が必死に叫んでいるのが聞こえる。

「こらぁ、もっと動かなきゃダメじゃないか。動きで負けてるぞ!!」

「お前たちのユニフォームは真っ白じゃないか。栄光みたいに必死で走ってみろ!」

確かに、こちらのユニフォームは泥だらけになっていた。

得点数は忘れてしまったが、私たち十一期は勝利を手にしていた。ファイティングスピリットの勝利であった。私たち自身もうれしかったが、世話をしてくださった松田さんも大喜びしてくださったし、後日、田畑先輩を始めとする諸先輩方にも「意外な」結果に大いに喜んでもらった。

諸君、あの十一期にもこういう輝かしい一戦の経験があるのですよ。

これを書きながら、色々の小さなエピソードがたくさん浮かんできたので、その幾つかをご紹介してみようと思う。

その1

陸上競技のグランドで練習していると、よくボールが高いフェンスを飛び越えて海に落ちてしまった。冬の北風が吹くころは、その風に乗ってボールはドンブラコッコスッコッコと対岸の海上自衛隊基地の方へと流れていってしまい、我々はなすすべもなくボー然と見守った。

その2

体育祭でサッカー部は招集係を仰せつかり、誇りを持ってその仕事を果たしたものだった。その後は決まって後夜祭と称して、勝手に燃料となる材木などを集め、ファイヤーを囲んで、パンと牛乳で夜遅くまで騒いだ。

私が高一の時のそれは雨のせいか、講堂二階の合併教室が会場になった。恒例のコーリングというゲームに飽きて、「ぶん殴りっこするべぇ」と言うことになった。顔が見えてはまずいと言うことで、室内の電気を全部消した。しかし、外の明かりで実はお互いの顔は見えたのだが、見えないという暗黙の了解の下に、無礼講で乱闘が始まった。

ボクシンググラブなどなしで、素手のこぶしで殴りあったのだ。私は、当時サブキャップテンだった十期の林さんのみぞおち辺りを殴り上げ、林さんは大げさに両手を広げて引っ繰り返った（林さんごめんなさい）。私もすぐに誰かに右のほほ骨辺りをポカッとやられた。ものすごく痛くて、途端に戦意を喪失して、後ろに下がった。

それにしても、後夜祭等に関して届けなどを学校に提出して許可をもらったという記憶がない。どんなグループがどこで何をしているのか、学校は把握していたのだろうか。先生方もご苦労さん会があったとみえて、ビールでご機嫌のよくなった先生が、「よぉ、お前たち、まだやってんのかぁ」などと立ち寄られたこともあった。私自身が学校の先生をやっ

1961年の世相

1月　米大統領、ケネディ就任
4月　ソ連初の有人宇宙飛行に成功
8月　東ドイツ、ベルリンの壁構築

中学夏季大会で優勝した8期

ている今、当時はとてもとてもおおらかな時代だったのだなと思うのである。

その3

冬休みと春休みはよくサッカー部の高校生同士で、丹沢の栄光ヒュッテで合宿をしたものだった。外は氷点下十度以下で粉雪がチラチラと舞い、中ではルンペンストーブで薪がチョロチョロ燃えている。その生活自体がとてもロマンチックで好きだった。

対岸からの水道の水が凍ってしまわないようにと水は出しっぱなしだった。

朝の会話――「おい、水冷てぇなぁ。二、三日、顔洗わなくたって、歯ぁ磨かなくたっていいよな」。炊事の時間――「おい、ジャガイモは洗うのか。水、冷てぇな」「どうせ煮るんだからさ、いいよ」

何がいいのかは、豚汁が出来上がってからおたまで鍋をかき回してみれば分かる。底でおたまがジャリジャリと音を立てるのだ。

夏の合宿は、厳しい練習で筋肉痛となり階段の昇り降りが苦痛であったり、トイレで座れないと騒いだりしたものだ。

「山よ、さよなら、ご機嫌よろしゅ。また来る時には笑っておくれ」

「十一期」編集部（『DASH』第8号より抜すい）

春の合宿の時から現高一、十一期生の積極性、自主性の欠点についていろいろと議論が成され、現在の部の代表である高二、十期生も度々ディスカッションを開いて次の年代を背負うべき高一について話し合った。

まず春は全面的に否定されていた現高Iのファイトと積極性について、上級生の意見との違いを合宿の日誌からさぐり、又高一の言い分を書いてみたい。

七月二十二日　矢島　十期

昨日は栗原さんから、高Iに対して部生活についての文句をいわれた。俺はこんな文句の出ないうちに、早く高Iが積極的に部生活をよりよくしていかなければならなかったと思う。

ボールの事を例にとる。今朝、誰かが言っていたことであるが、「早いとこ、ボールを入れようぜ。又文句言われるから」。この様な言葉を本当に俺は卑下する。何たる消極的でかつ逃避的な態度であろうか。この様な気持で事を成すのならむしろ何もしない方がよい。俺は高Iの部生活に対する積極的な協力を望む。

それにしても今日の練習後のボールの仕事は非常によかった。俺は高Iの心を疑わない。今日の仕事ぶりについては本当に礼をいう。

七月二十三日　小島　十一期

今迄高一にいつも文句が出ているが、今日はよくできたのではないか。いつも今日のように積極的にいきたい。春の合宿にも同じことを言われている。自覚しよう。

七月二十四　葉山　十一期

高IIのひまな人達はボールがヌイテなかった時等気がついたらヌイテくれてもいいだろう。そして後でその事を注意してくれ、僕等はボールをヌイたり、なんやかやでいつも夕飯に遅れてしまう。又ボールに空気を入れる時も手伝ってくれ。美人になる暇もない事がある。高IIの暇な人はもう少し高Iの仕事を手伝ってくれたらよいと思った。

We are 12期

時代の宿命で「少数民族」だったが、役者は揃っていた

伊東一雄
星野　崇
葉山東平
越智信利
伊藤勝昭
佐藤　孜
中川　謙
末田勝利
樋口　淳
成宮隆夫
磯部　穆
高野　惇
横川敏憲
岩崎怜一
鈴木賢英
鈴木重遠

相手を傷つけずに勝つ闘いがあった

中川　謙

ぼくたち12期生は、たいていが日本の敗戦の年に生まれている。世情を映して、この年に出生した日本人は極端に数が少ない。ぼくの場合は小学校のクラス数が3つだった。次の学年は6つ、3年先になるとこれが12にふくれ上がった。このマス集団が後にいう団塊の世代。総じてぼくたちは「へこみ」扱いされていた。

受験でも、一年先輩の諸兄は「浪人しても、あとが楽」と公言していた。一年後輩は「浪人勢は恐るにたらず。現役合格が保証されたようなもの」とたかをくくっていた。

サッカーでもそうだったような気がする。当時、栄光学園といえば神奈川県ではサッカーの雄だった。すぐ上の9、10期が一つの黄金期を築いた。関東大会出場を果たした。ユース日本代表に選ばれた先輩もいた。1年あとの13期がまた強かった。国体の県予選を制覇し、その勢いで冬の全国大会への出場まで成し遂げたのである。

ここまで書いて、この原稿をうかつにも引き受けたことを少し悔やむ。「少数民族」のぼくたちには、宿命的に威勢のいい話が乏しい。それでいて、サッカー部の記念誌に何かを書かされるとは、なんと損な役回りか。そこで、だ。ぼくたちの仲間から、どこに出しても恥ずかしくないプレーヤーを、あえて三人に限定して紹介しよう。

GK佐藤孜君。うっかり彼と取っ組み合いをしたことがある。しなやかにして強じんな筋肉とはこういうものなのか、と思ったことだ。ゴールの前で変幻自在、イルカのように跳ね、ムササビのように飛んだ。

LW越智信利君。なぜレフト・ウイングかって？　左足が蹴れたのさ。それも人一倍強烈なキック。サッカーがマイナーだったあのころは、それ自体が希少価値だ。自ずとぼくたちの攻撃は、左サイ

1962年の世相

8月　堀江謙一、小型ヨットで太平洋横断に成功
10月　キューバ危機
W杯第7回チリ大会、ブラジル優勝

想い出のOne Scene「ビールよりうまい水」

佐藤　孜

部活動から40年もたってしまった今、どうも試合に勝った、負けた、どう勝ったのか、何故負けたのかの記憶はほとんど残っていない。サッカー部の記憶で今でも明瞭に覚えているのは、練習の中休みに飲んだ水が目茶おいしかったこと。今、ビールを飲んで、ああうまい、と思うことがあるが、あの時の水のうまさには到底かなわない。フラフラに疲れているはずなのに、休憩の笛が鳴ると、不思議と素晴らしいダッシュで教員宿舎になっていたかまぼこハウス（グリーンハウスとハイカラな名前で呼んでいた）横、野球グランド1塁ベース後ろの水道蛇口へ一目散。蛇口にかぶりつくようにして腹一杯水を飲んで、そのまま天を仰いでグランドにひっくり返る。どこまでも青い空と、日陰を作ってくれる樹木の緑の記憶は今でも鮮明である。

試合の勝敗は結果として付いてくるもの。試合に勝ってもその後の人生に大きな力にはならないが、毎日の地道で、苦しい練習が後々の社会生活でたくましい力になってくれている。それだけ一生懸命練習していたことを今になって誇らしく思う。

想い出のOne Scene先輩

星野　崇

中学2年の時だったと思う。高校の先輩たちの大事な試合の応援のために藤沢のサッカー場に行く時だった。いつも金を持っていない小生は藤沢駅から歩いた。もちろん応援に行くのだから制服を着ていた。しかし思ったより遠かった。これじゃあ前半が終わるまでに間に合いそうもない。そこで走った。どのくらい走ったか、とその時後ろからやってきたタクシーが止まり、乗客が僕を乗せてくれた。初めて見る先輩だった。

「俺、ナカムラゲンジって言うんだ」車の中で悠然と座りながら話し掛けてくれた。背が高くて、マスクのいいかっこいい先輩だった。汗びっしょりの僕は、自分もいつかこういう先輩になりたいと心中密かに思った。卒業生のOBだった。

主な戦績

〈中学３年夏の大会〉期末試験で不戦敗（どこまでいったか不明）
〈中学３年冬の大会〉決勝で藤沢一中に負け
〈高校２年関東大会予選〉準決勝？敗退。相手は湘南、小田原？
〈高校２年全国大会予選〉決勝で小田原に負け

「腰のすわった司令塔」伊東キャプテン（前列左）

中学の頃の12期

ドからが多かった。

ＬＨ伊東一雄君。新人類の肉体的特徴を一つ挙げれば、重心の高さだろう。その点、彼は旧人類の模範だ。腰のすわった司令塔だった。20数年間も世界の危険地帯で、平然とビジネスマンをやってきたのも納得できる。

三人に限定した以上、これで打ち止め。申し分ない素質の持ち主は少なくない。けれども全体としてかすむ。これは時代がぼくたちの学年に課した宿命だったのだ。そんなぼくたちに、まことにふさわしい試合の思い出がある。それを最後に記す。

高二のときの冬の全国大会予選準々決勝。相手は小田原高校だった。ここにはすごいヤツがいた。越智君と同じレフト・ウイング。やっぱり、すぐれものはこのポジションだ。ヤツにはすぐ前の夏の関東大会予選で、手痛い目にあっていた。距離にして30メートルはあろうかという、決勝のシュートを決められたのだ。ムササビ佐藤君のジャンプをわずかにすり抜ける、神がかりのゴール。こんどは二人がかりでヤツをマークした。するとなかなか勝負がつかない。前半が過ぎ、後半が終わった。

延長戦の表、そして裏へ。ヤツは足を痛めたらしい。スパイクのひもをゆるゆるにしている。目には涙を浮かべていた。向こうも、こっちももう必死。０―０で試合は終わった。勝負はＰＫ戦でなく、じゃんけんと十円玉のくじでつける。グランドの向こう側で、キャプテンの伊東君がくじを引いた。結果が出たらしい。重心の低い例の走り方で、こっちへゆっくりと走ってくる。

オーイ、どうなったんだ。役者だね、我らがキャプテンは。一呼吸おき両手を大きく天に広げて見せたたのだ。夕日を背に、グリコの看板みたいだった。勝利の女神がぼくたちにほほえんだ時の光景。１９８５年、阪神タイガースのリーグ優勝を忘れられない。ヤクルトを相手に、引き分試合をして優勝を決めた。あるグラビア誌がこう書いた。

「相手を傷つけずに勝つ。いいじゃないか、阪神らしくて」

そう、ぼくたちもそんな闘いをした。

We are 13期

関東大会、国体、全国大会の県代表をすべて手にした伝説の個性派集団

吉田伸一（ＬＩ）
青山明夫（ＲＢ）
渡辺　浩（ＬＷ）
青戸邦嗣（ＧＫ）
村田譲二（ＣＦ）
秋山武仁（ＣＨ）
渡辺幸男（ＲＷ）
戸田忠澄（ＬＢ）
佐藤純一（ＲＩ）
相川亮一（ＬＨ）
塩谷英策
太田忠彦
山下文彦
（旧姓・中村）
中村光世

1963年の世相

ビートルズ旋風
11月　米ケネディ大統領暗殺

わが13期の軌跡

渡辺幸男

50年記念誌の原稿を書くにあたり、30数年ぶりに当時の「ダッシュ」を読み返しているうちに、懐かしい数々のシーンが脳裏に甦ってきた。

中学3年の夏の大会決勝で宿敵藤沢一中に敗れ全員涙したこと、冬の大会では決勝の相手が藤沢一中ではなく、醒めた優勝となったこと。高校1年の全国大会県予選決勝戦の対小田原高校に延長戦の末敗れ、涙ながらに来年の雪辱を誓ったこと。最後の高校2年で、初の関東大会出場、国体出場辞退、念願の全国大会出場成って歓喜したこと。

13期生は中学・高校を通じ最高のサッカー部生活を送れたと、今更ながら実感している次第である。

これらは単に我々13期だけで達成できたわけではない。6期生による全国大会初出場以降、毎年惜しいところで出場を逃してきた諸先輩方の絶大なる指導と支援、さらに一緒に戦った12期生、14期生の協力有ってのものと感謝している。

中学時代（1959・4～1962・3）

この時代、今と違い日本のサッカーなんて一般人が認知するスポーツではなかった。多分大半の者が栄光に入学しなければ殆ど接する機会もなかったと思う。たまたま栄光に入学し、スポーツ大会で体験し、一つのボールをがむしゃらに蹴り合い、ゴールすることに魅了されてのめり込んでいった者が多いと思う。

また、栄光では9期生・10期生が県下高校サッカー界の強豪として、その名を轟かせていた時代であり、我々13期生にとって異星人のような存在で、彼らの練習や試合を憧れと将来の自分にダブらせながら眺めていた。ここに13期生のサッカーの原点があった。

●61年夏・県大会決勝涙の敗戦

決勝までの3試合危なげなく勝利し、待ちに待った藤沢一中との決戦である。

同中には前年冬の大会決勝で2対3で敗れ、我々13期にとってもリベンジの一戦であった。期末テスト後間もなくコンディション的には決して良い状態ではなかったが、5月の練習試合では4対2で勝っており、自信を持って臨んだ一戦であった。

試合が始まり栄光が終始主導権を握り、ほぼ一方的なゲーム展開であったが、決定的なチャンスをシュートミスで何度かつぶした後半、ペルー帰りの敵エース吉水（高校は鎌学で、これ以降も常に天敵としてついて回った。後に日本代表も経験）のハーフラインからの5人抜きドリブルシュートが栄光ゴールを割り、これが決勝点となり、またも返り討ちにされた。終了のホイッスルと同時にグランドに呆然と立ちつくし、ミーティングで全員が泣いていた。

また一つ強くなるための洗礼を受けた瞬間であった。

●同年冬・県大会優勝

夏の雪辱をかけ、今度こそはとの思いで臨んだ大会である。1・2回戦は順調に勝ち進んだが、準決勝の対聖光学院戦で思わぬ苦戦を強いられ、何とか決勝に勝ち残った。ところが当然決勝であたると考えていた藤沢一中が、準決勝で六角橋中に苦杯をなめ、決勝の相手が六中となり何か気勢をそがれた感じで、優勝したもののその喜びが今一心からわき上がってこない初優勝であった。

高校時代（1962・4～1965・3）

中学時代の思い出を残し高校に進学、悲願の全国大会を目指して始動した。

高一時代は12期生をサポートし、常時5～6人が試合に出場。全国大会県予選決勝対小田原高に延長戦の末敗れたが、この死闘の経験が翌年の悲願達成に結びついていった。

●新人戦一年生だけでの優勝快挙

13期主体で臨む初の公式戦であり、二年生主体の他チームとどれだけ渡り合えるか、この一年を占う大事な大会であった。

初戦から強敵慶応との対戦となり気の抜けない戦いとなったが、これを3対1で下し、2回戦湘南高戦も点の取り合いの末、終了間際の決勝ゴールで一点差の接戦を制しチーム全体の調子も上がってきた。

全国大会出場を機に六甲学院と親善試合（六甲グランドにて）

県予選決勝で藤沢高を敗り神奈川代表となる

1月4日、本大会第1回戦で三重県代表・上野高と対戦

準々・準決と危なげなく勝ち上がり、決勝戦は宿敵吉水を擁す鎌学との対戦となった。先制点を許す苦しい展開となったがすぐ同点に追いつき、その後、後半の半ば過ぎまで一進一退の好ゲームとなった。後半20分過ぎ、ついに栄光が勝ち越しゴールを決め、終了寸前追加点を上げて優勝を勝ち取り、最先の良いスタートが切れた。

●関東大会出場初の県外遠征

13期が高二となって初の公式戦、昨年は決定戦で敗れ出場を逃しており、今年こそはの意気込みで県予選に臨んだ。初戦を大勝し、決勝リーグの一番手、憎き小田原高を4対1で撃破し昨年の借りを多少返してから、若干気が緩んだか次の2試合を一点差の厳しい戦いを余儀なくされた。

最終的には、県優勝を逃したが関東大会への出場権を獲得した。この大会での敗戦（対茅ヶ崎高）が、当年度における県内公式戦唯一の黒星であった。

本大会は、7月23日から千葉市で開催され、一回戦で都立井草高校と対戦したが、1対3で一蹴され、井の中の蛙を思い知らされた。

●幻と消えた国体出場

関東大会一回戦で敗れ、夏の強化練習でバックス・フォワードの更なる強化を図って臨んだ国体県予選。残暑厳しい中、連日の戦いとなって栄光のスタミナが心配されたが、決勝までの3試合は大量得点、無失点で切り抜け、練習の成果を見せた。

いよいよ決勝戦対鎌学である。試合は

想い出のOne Scene

「第42回全国高校サッカー選手権開会式」

ついにやってきた大阪うつぼサッカー場、現在の国立競技場での開会式と比べると、土のグランドでテレビ放映もない、いたって地味な開会式であったが、全国の予選から勝ち残った32チーム・約600人の選手のみに出場を許された場である。周りを見ると、同じ高校生とは思えない藤枝東・浦和市立・大阪明星・山城・山陽等の強豪チームが並び、その中で新調のライトグリーンのユニフォームに着替えた我が栄光生が緊張感をただよわせ、やや場違いの感じで肩を並べていた。

いよいよ開会式の入場行進が始まり、我がイレブンは神奈川県代表として、全栄光生・ＯＢを代表し吉田主将を先頭に、胸を張り堂々の行進を行った。行進最中、頭の中に今までの数々の場面が去来し、大きな夢であったこの場に立てた感激と、誇りとで胸が一杯となり、その後の祝辞、挨拶等については一切記憶にない。

前半16分栄光の先取点で始まり、後半開始直ぐ吉水の得点で追いつかれ、その後一進一退が続く。17分、栄光が勝ち越し、19分またも吉水に同点ゴールを決められ、延長にもつれ込んだ。スタミナ勝負では鎌学に利があると思われたが、前半9分栄光が決勝点を押し込みそのまま逃げ切った。終了ホイッスルと同時に全員がグランドに倒れ込む死闘であった。

こうして勝ち取った出場権であり、喜びもひとしおではあった。が、待っていたのは出場辞退の現実であり、泣くに泣けない状況であった。サッカー部50年の中で、最も大きな出来事の一つであろう。

●ついに掴んだ全国高校サッカー選手権出場権

こうした苦しみを乗り越えまた一つ成長し、13期として最後の全国大会予選に臨んだ。

栄光は初戦から安定した戦いを続け、決勝までの3試合を得点11、失点0で切り抜けた。余談だが、この大会の最中11月23日の早朝、ケネディー大統領の暗殺が報じられた。

さあ決勝戦だ。鎌学こいこいと願ったが、準決勝で藤沢高に足下をすくわれ敗退してしまい、また我々にとっては思いがけない対戦相手となった。さすが決勝戦ということで立ち上がり緊張気味であったが、前半5分先制点をとると固さもほぐれ、一方的な栄光の展開となるものの追加点がとれず前半が終了。

後半に入ってもそのままの状況で進展し、ようやく15分二点目、三点目と連取しほぼ全国大会の切符を手中にした。26分にだめ押しの四点目をゲットし、ついに栄光悲願の二度目の全国大会出場権を獲得した。

いろいろな体験を乗り越え、ついに県の頂点に立った瞬間であったが、戦った選手は意外にこの事実を冷静に受けとめていた気がする。むしろ6期以降6年間苦杯をなめてきた先輩諸兄の喜びの方が大きかったように思う。

●本大会善戦も一回戦敗退

年が明けて1月4日、場所は堺金岡サッカー場（因みにグランドは土、芝になれた我々には不利）、対戦相手は前年国体準優勝チームで三重県代表の上野高校。

午後4時キックオフのホイッスルが吹かれた。上野は百戦錬磨の着古したユニフォーム、栄光はこの日のためにあつらえた新調のライトグリーンのユニフォーム。試合はスタートから上野ペースで終始し、栄光ＧＫを中心にディフェンスが頑張り0対0で前半を終了。

相手ペースにも徐々になれてきて、栄光にも幾度か得点のチャンスが生まれた。しかし、後半に入り依然上野の攻勢は止まらず、ディフェンス陣が体を張って数度のピンチを救うが、残り数分左コーナーキックからゴール前の混戦となり、敵フォワードが突っついたボールがＧＫの手をかすめ、ゴールネットを揺らした。栄光も最後の力を振り絞り反撃を試みたが、無情のホイッスルが吹かれた。

選手一人一人の顔には全力を出し尽くしたという満足感がただよい、負けた悔しさはあるものの涙のない敗戦であった。観客は少なかったが、負けた栄光の善戦を讃える拍手の方が大きかった。

＊

終わりに、個性派13期を強いリーダーシップで引張ったキャプテン吉田、マネージャーワンちゃん・太田・中村（光）、さらに多くのピンチを救ったＧＫ青戸、青山・戸田・秋山・中村（文）の堅実なディフェンス陣、飄々とプレーした相川、塩谷、回転の速い足で相手を翻弄した佐藤、そして、決して豪快なシュートは好まず相手をおちょくりながら決定的な仕事をしたＣＦジョージ……40年前の彼らの姿を思い浮かべながら筆を置きたい。

主な戦績

1961年（中学３年）				
夏県大会	１回戦	岡村中	7―0	○
	２回戦	松本中	5―0	○
	準決勝	真鶴中	3―1	○
	決勝	藤沢一中	0―1	●
冬県大会	１回戦	白山中	7―0	○
	２回戦	寒川中	3―0	○
	準決勝	聖光学院	2―1	○
	決勝	六角橋中	4―1	○
1963年（高校１～２年）				
県新人戦	１回戦	慶応高	3―1	○
	２回戦	湘南高	4―3	○
	３回戦	横浜商	4―2	○
	準決勝	湘南通信	3―0	○
	決勝	鎌倉学園	3―1	○
関東大会				
県予選	２回戦	県鎌倉高	7―0	○
決勝リーグ		小田原高	4―1	○
		横浜商	1―0	○
		法政二高	3―2	○
		茅ヶ崎高	2―3	●
本大会（千葉）				
１回戦		井草高（都代表）	1―3	●
国体県予選				
	２回戦	相模工業	7―0	○
	３回戦	慶応高	3―0	○
	準決勝	神奈川工	6―0	○
	決勝	鎌倉学園	3―2	○
全国大会				
県予選	２回戦	緑ヶ丘高	3―0	○
	３回戦	茅ヶ崎高	3―0	○
	準決勝	慶応高	5―0	○
	決勝	藤沢高	4―0	○
本大会（大阪）				
１回戦		上野高（三重代表）	0―1	●

NECメディアプロダクツ［サッカーの本］

2002年、世界のサッカーピープルと喜びを分かち合おう！

サッカージャーナリスト **大住良之**（18期）著

サッカーの話をしよう 6

「東京新聞」連載コラム
単行本化　最新刊

●四六判／並製／280頁　●定価:本体1400円+税

［シリーズ既刊］**サッカーの話をしよう 1～5** 好評発売中（定価:本体1262円～1400円+税）

＊全国の書店でお求めください。
＊発行元:NECメディアプロダクツ株式会社　＊旧社名:NECクリエイティブ
東京都大田区平和島4-1-23（JSプログレビル）〒143-0006　TEL:(03)5471-4013　FAX:(03)5471-4099
出版案内　**http://www.mepros.co.jp/books/**

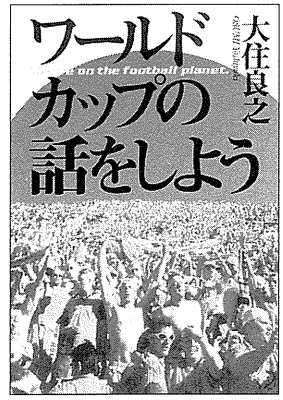
NECメディアプロダクツ［サッカーの本］

●財徳健治 著
サッカー・アンソロジー1～3
サッカー・マガジンの連載コラムを単行本化。ワールドカップ、日本代表、Jリーグの話題満載。
定価:本体各1400円+税

●大住良之（18期）著
サッカーの話をしよう1～6
とことんサッカーを愛するジャーナリストがその魅力を語る珠玉のコラム集。「東京新聞」で長期連載中。
定価:本体各1262円～1400円+税

●大住良之（18期）著
ようこそ、サッカーの惑星へ
サッカージャーナリストが世界のサッカーピープルとの交流を綴ったヒューマン・ドキュメント。
定価:本体1500円+税

●大住良之（18期）著
ワールドカップの話をしよう
コラムと写真で織りなすワールドカップの魅力。「サッカーの話をしよう」シリーズの特別編。
定価:本体1500円+税



＊全国の書店でお求めください。
＊発行元:NECメディアプロダクツ株式会社　＊旧社名:NECクリエイティブ
東京都大田区平和島4-1-23（JSプログレビル）〒143-0006　TEL:(03)5471-4013　FAX:(03)5471-4099
出版案内　**http://www.mepros.co.jp/books/**

We are 14期

二年連続で関東大会出場、浦和市立に苦杯、鎌倉学園と死闘、大船移転で苦難の一年

大島弘尚（ＬＢ）
（旧姓・赤沢）
新井正夫
（マネージャ）
内村　透（ＬＷ）
大橋憲一（ＬＨ）
笠木英文（ＲＷ）
吉川　実（ＧＫ）
小菅恭彦（ＲＨ）
佐藤研三（ＬＩ）
高垣洋太郎（ＲＢ）
中瀬英憲（ＬＩ）
新倉正和（ＲＢ）
福田昭紀（ＲＩ）
堀尾　泉
（マネージャ）
宮内恒雄（ＣＨ）
山本　裕
（マネージャ）

1964年の世相

中国人民解放軍「毛沢東語録」出版
10月　東海道新幹線開業
10月　第18回オリンピック東京で開催

雨の田浦グランド

新倉正和

十四期のサッカーは、常に十三期に比較され、弱い弱いと言われながら中学三年のチームをスタートした。十三期は、結局、中高とも出る大会全てで（中学の夏の県大会を除いて）優勝したのだから相手が悪すぎたが、その下の学年ということで十四～五歳の子供ながら相当なプレッシャーを感じながらのスタートだったのだと思う。「ダッシュ」の記録を紐解くと、最初の練習試合は、初戦・第2戦とも三点差を付けられて負けている。その後、夏の県大会を目指して指導者の十二期佐藤（孜）さんの下、ひたむきに練習したのだと思うが、メンバーの中に一向に自信は生まれて来なかった。

そして夏の大会の前日、練習の最後、高一（十三期）と練習試合を行った。雨天で田浦のグランドは、田んぼのようにぬかるみ、水溜りがあちこちにできていたが、それでも十三期のフォワード陣の突破力、展開力は弱められることなく、容赦なくゴールを重ねて行った。ペナルティエリア、ゴール前で、必死に食い下がり悲壮なスライディングをしても、スピードとパワーに勝る十三期の攻撃を止めることはできない。恐らくハーフでも十点近く入れられたのではないか。

終了後、雨と泥水でパンツまでぐしょぐしょになりながら絶望的な気持ちで佐藤さんの前に集まった我々だったが、全く意外にも佐藤さんは「良くやった。ボロ負けだが、最後まで高一に食い下がりぶつかって行ってたぞ。強い相手でも戦う気持ちが出せたのは、今日が始めてだ」と言われたのだ。思い返してみると、試合中スライディングされた十三期が何度か「お前ら、汚ねえぞ」とやや喧嘩腰になっていた。そんなことは、それまでなかった。それだけ、十四期が始めて捨て身の激しいプレーをしていたのだろう。

意識こそしなかったが、多分、佐藤さんのこの言葉で、何らかの自信が十四期の中に芽生えたのだろう。決して快進撃ではなかったが、県大会を勝ち進み、準決勝では春の練習試合で大敗した六角橋

想い出の One Scene

真夏、館林の惨敗

群馬県館林の夏は、猛烈な暑さだった。昭和39年の関東大会、対浦和市立戦、炎天下の真昼の試合だった。相手には、後の日本代表選手が、５～６人居た。結果は、１－９の惨敗。13期の渡辺幸男氏の意地の１点が救いだった。

全国大会予選準々決勝

鎌倉学園との準々決勝、相手のエースは後に古河電工で日本代表にもなった吉水。この試合は皆気合が入っており、ほぼ互角だったと思う。０－１の惜敗。ものすごく残念だったが、反面さわやかな14期ラストゲームだった。

鎌学は、全国大会で前年優勝校の藤枝東を倒し、３位となった。

（当時の「ダッシュNo.15」の戦記から）

鎌学は国体・関東大会と出場し有力な優勝候補だ。吉水・辻・池田とそろった敵ＦＷはさすがに強い。

それに対し栄光はマークをがっちりする。ゴール前では、がむしゃらにスライディングする。吉水がボールを持ったら、ハーフまで加わって倒す。

この順調な立ち上がりで栄光気力を見せ、前半ほぼ互角に戦う。両ウイングからのセンタリングもよく、前半終了近くでは栄光は相当押した。ペナルティ近くでフリーキックを得、先取点になるかと思われながらも惜しくも外れた。

後半になると栄光疲れが見え始め攻撃力が鈍る。次第に相手のペースにまきこまれ、バックもゴールを横切るボールに苦しめられる。

後半17分左からのコーナー、バックがキーパーともたつく間、相手のヘッディング。誰だかはっきりしない。砂ぼこりの上を飛んで、背後のゴールに入った。ついに一点入れられた。

その後、反撃に出てバックも上がって攻撃したが、相手に阻まれる。その内、背後に回られてピンチも続く。体力の差がはっきりとあらわれる。イレブン最後の力を尽くし相手に迫るが、ついにタイムアップ。

高校３年当時、大船の新グランドにて

主な戦績

昭和37年度中学県大会夏季　準優勝
（決勝：０―１対藤沢一中）
昭和37年度中学県大会冬季　ベスト４
（準決勝：１―１抽選負対舞岡中）
昭和39年度高校県新人戦　準優勝
（決勝：延長２―３対茅ヶ崎高校）
昭和39年度高校関東大会県予選
ブロック優勝（決勝：３―１対神奈川工業）
昭和39年度高校関東大会　本大会出場
（一回戦：１―９対浦和市立）
昭和39年度高校全国大会県予選
ベスト８　（準々決勝：０―１対鎌倉学園）
昭和37年度中学：全14戦８勝４敗２分
得点35　失点16
昭和39年度高校：全19戦12勝６敗１分
得点44　失点29

昭和39年度関東大会（館林）入場行進

中学２年当時、田浦のグランドにて

中に一対０で勝つに至った。決勝では藤沢一中に負けたが、弱い十四期という汚名をはらした気持ちだった。

いわば壮行試合であったが、同じような壮行試合を十三期にやってもらい、自信を付けたことがもう一度あった。高二の初夏、関東大会の県予選の前である。

前年関東大会と全国大会の両方に出場した十三期は高三として受験勉強に専念していたが、県予選の直前に十三期対十四期の試合をやり、「勝った方が試合に出よう」と冗談を言い合っていた。唯、内心、我々は心配していた。何せ、これまで十三期とは対等に試合などできたことがなかったのだから、いくら相手が引退状態であっても勝てるかどうか非常な不安があった。

しかし、さすがの十三期もコンディションの絶対的な差は如何ともし難く、十四期は楽勝できた。理由は明白であった（渡辺・相川両先輩が十四期チームに残留してくれたことも大きかった）が、我々にとって十三期に勝てたというのは、非常な重みがあった。自信をもった。そして、関東大会の県予選を勝ち抜き、本大会に二年続けて出場することができた。

十三期には全てに敵わなかったが、十三期について全国大会に行けたこと（十四期から二人出場も果たした）、十三期・十四期と続けて関東大会（千葉・館林）に出場できたこと、高二の中心的学年として田浦のグランドの最後を見届け、大船のグランドが未整備の中で練習スペース探しで苦労したこと等、良い思い出を作ることができた。七月の館林のくそ暑い中、浦和市立に一対九で大敗したことも、今では良い思い出である。

We are 15期

練習試合には滅法強かった。大船移転、県下の新興チーム台頭で苦闘

伊吹英世
梅澤　裕
小寺秀俊
木下　明
草間晴夫
菅原久雄
菅谷　誠
辻　恭平
中村　茂
野口明男
吉田伸二
（1995年２月24日逝去）

菅原久雄

15期は、栄光卒業後今年で35年、既に53歳。35年前、40年前の少年時代の記憶はなかなか戻らない。埃にまみれ、黄ばんだ当時の『ダッシュ』を探し出した。少しずつ35年前、40年前の様子が浮かんできた。

13期は黄金時代を築いた。13期が高2の時、全国大会にまで出場した。14期も黄金時代を引き継ぎ、関東大会で群馬県館林市に遠征した。当時高1の15期はその恩恵に預かった。

15期は何故か中学時代から練習試合には滅法強かった。練習試合で負けたという記憶はない。しかし、本番の試合は別である。中3の県大会や高2の大会の思い出はよろしくない。16期や17期もそれなりに活躍した。15期は栄光サッカー部黄金時代のエアーポケットであった。

中学を田浦で過ごし、高1の夏に大船への移転を経験した我々は、大船移転後、サッカーグランドは芝生の養生で長い間使用できなかった。その時高2の14期は、秋の全国大会県予選の練習が殆んどできなかった。練習は、学校の近所の造成地でのヘディングやサイドキックとランニングばかりであった。この状況は高2の夏まで続いた。高1の秋、1964年東京オリンピックが開催された。あの東洋の魔女やアベベが活躍した時である。また、横浜三ツ沢でサッカーが行われた。開催国日本は、サッカーに代表チームが出場した。勿論国内ではプロがない当時、今で言うA代表で、プロの参加が認められない時代で、オリンピックでは共産圏が滅法強かった。

この東京オリンピックをきっかけとして、県内でサッカー強豪校が増えた。それまでは、鎌学、湘南、茅ヶ崎、小田原、県鎌、慶応ぐらいだったが、新たに相工大付属などがどこかの強豪校の指導者を迎え強化を始めたと聞いた。サッカーが盛んになり出した時であった。

練習試合に滅法強く、本番ではすぐ姿を消す15期ではあったが、ここで二、三のエピソードを紹介したい。

まず高1の1月。主将、副主将の選出は、15期の話し合いによって候補者を選んだ。当時の『ダッシュ』には「今年の主将選出は例年と異なり高1の自主性に大きくまかせられた。高1の協議会が数多く開かれ、これを支持するかどうかを選挙にかけた」とある。15期全員が忌憚のない意見を出し、案をまとめた。

当時、大船観音の下から栄光に行く道路はまだなかった。登下校は、民家の脇を通り山道を歩いた。15期の案がまとまった日の夕暮れ、皆で、ドリームランドへ行くモノレールの方を遠回りして夕日を見ながら大船駅まで歩いた。この歳で言うのも恥ずかしいが、「今こそ青春、これから15期の時代」という高揚した気分であった。

もう一つは、高1冬の新人戦の鎌学戦である。新人戦は15期が初めて中心とな

想い出のOne Scene　痛恨のワントラップ

中学、高校を通じて、練習試合には強く、本番では実力を発揮できなかった15期であるため、ここでは、14期に連れていっていただいた高１の時の関東大会について紹介したい（14期の想い出のワンシーンと重複するかもしれないが、15期の状況を勘案され、ご容赦いただきたい）。

この関東大会は群馬県館林市で開催された。13期に続く２年連続で、同時に田浦時代最後の本大会出場である。30年余以前のこと故、子細なことは覚えていないが今年と同様にとにかく暑い夏であった。

私は、レフト・インナーとして出場させていただいた。当時のサッカー名門校といえば埼玉と静岡のチーム。第１回戦の相手は浦和市立、この年はあまり強くないという評判だった。始まると栄光が意外と押し気味であった。前半早々でまだ０対０の時、右からのセンターリングがペナルティエリアぎりぎりにいた私のところにきた。ゴールも空いていた。ダイレクトでシュートするかワントラップするか。一瞬躊躇した。トラップした途端あっという間に敵のバックスに奪われた。あの時、思い切ってダイレクトでシュートしていれば試合の結果は違ったかもしれないと今でも思っている。試合は、１対９で敗れた。今でも後悔しているワンシーンである。（菅原）

1965年の世相

ミニ・スカート大流行
２月　米軍、北爆開始

15期は中学時代を田浦で過ごした

大船移転後はグランドが思うように使えず苦労した（15期、16期）

キャプテンを先頭に試合前のアップ

って戦った。この時の鎌学は、正月の全国大会で全国第3位になったチームであった。大善戦であった。鎌学は、全国3位らしくプレーは巧妙であった。鎌学のハーフの一人に私は大腿部に膝を入れられ、あまりの痛さにうめいた。反則ではなく、随所にこのような巧妙なプレーがあった。しかし、この善戦も残念ながら15期だけの力ではなかった。『ダッシュ』に「2、3人が風邪で参加できず14期の手ならぬ足を借りた」とある。これを読み返すまで、この鎌学戦こそ15期唯一の活躍した試合と思っていたのだが。

高校最後の全国大会県予選も当時台頭著しい相工大付属に敗れた。前半は強風の風下、得点を許してしまった。しかし、後半一転して風は止んだ。結局0対2で15期は終わった。

追記。15期の吉田伸二君が亡くなり今年7回忌にあたる。彼は、13期主将の吉田さんの弟で、中学、高校を通じてフォワードで活躍した。彼についての思い出は数多い。若くして亡くなった彼の冥福を心から祈りたい。

主な戦績

中学：　夏季県大会　1回戦　引き分け抽選で敗退
　　冬季県大会　準々決勝で敗退
高校：　新人戦　3回戦　引き分け抽選で敗退
　　関東大会県予選　2回戦敗退
　　全国大会県予選　1回戦敗退

We are 16期

戦績は残せなかったが、校内サッカー文化の高揚に貢献した仲良しチーム

岸田　隆（ＭＦ）
紺野治夫（ＦＷ）
佐藤　滋（ＦＷ）
関　一敏（ＭＦ）
平本　修（ＬＩ）
堀　信博（ＬＷ）
前島啓一（ＭＦ）
村上　繁（ＤＦ）
茂木正平（ＲＩ）
望月晴文（ＭＦ）
山縣由起夫（ＭＦ）
山田俊信（ＤＦ）
山本　薫（ＧＫ）
吉川建司（ＭＦ）
渡辺　泰（ＲＷ）
須川和比古（ＤＦ）
今野秀雄
福田恵明

谷間のラーメン屋

望月晴文

いきなり年寄り臭いことを申し上げますが、人生50年をすぎて、中年まっただ中になると無性に昔の仲間が恋しくなるのか、最近よく栄光サッカー部の同期と会う機会が増えました。

飲み会はもちろんのこと、年に3～4回ゴルフをご一緒しています。現役時代は、13期とか17期とかの栄光サッカー部の黄金時代（?）の谷間の我が16期は、目立った戦績もなく、肩身の狭い、寂しい集団でしたが、今や、仲良しで結束力の強い、中年集団になったようです。

サッカー部時代のことは、目をつぶれば、次から次と様々なことが浮かんできますが、その中で、今でも最も鮮烈に憶えている思い出は、中学2年生で、初めて東京に国際試合を見に行ったときのことかも知れません。

場所は後楽園、ソ連のディナモ・モスクワとドイツのボルシア・メーヘングラードバッハの試合でした。そう、後楽園なのですが、野球場ではなく、競輪場なのです。

当時は、今の現役諸君から思うと信じられないかも知れませんが、芝のグラウンドのあるスタジアムなどはほとんどありませんでしたから、競輪場のバンクの内側にあった芝生の空き地が唯一、国際試合をやれるサッカー環境だったのでしょう。ただ選手たちには、外に出たボールが自動的に戻ってくるといって評判がよかった（?）ようです。私にとっては、その後競輪場へ行く機会はなく、これが唯一の経験でした。

試合は、当然のことながら世界のトップレベルの試合でしたから、一つ一つのプレーに驚くばかりで、確か0対0の引き分けでしたが、妙に興奮したのを憶えております。確か、そのときに初めて、オーバーヘッドシュートを見て度肝を抜かれました。昔日の思いがあります。

実はこの話には後日談があって、それから約30年後の1993年に、私は仕事の関係で、ドイツのデュッセルドルフに赴任しておりましたが、その隣町がメーヘングラードバッハ市だったのです。その年はブンデスリーグで、ボルシア・メーヘングラードバッハは調子がよく、これまた近くのドルトムントと首位争いをしていたのですが、その直接対決の試合に、仕事で関係のあったメーヘングラードバッハ市当局から招待をされました。

3対3の引き分け試合で、ロイヤルボックスでビールをしこたま飲みながらの観戦でしたが（ボルシアのスポンサーはビール会社）、ホームの観客と共に燃えに燃えて、ほんとに花火がぼやになったりしたのですが、大いに盛り上がることができました。そのときのチームのオーナーが、やはり30年前にチームと共に日本に行ったことを鮮明に憶えておられました。

想い出のOne Scene

創立記念祭でのサッカー展

我々の中学・高校時代はサッカーがまだ極めてマイナーなスポーツであった。そんな時代にサッカーに触れ、その面白さを実感し、必死に頑張った。しかし、わが16期は何の結果も出せなかった。そんな我々でも、サッカーの面白さを何らかの形で次の世代にまた世の中に伝えようとしたのが、高校2年の時の創立記念祭におけるサッカー展の開催であった。

漠然とした企画しかないまま行けば何とかなると考え、アポイントなしで渋谷の岸記念体育館の日本蹴球協会を訪問した。偶然在席し、暇そうにしていた岡野俊一郎さんに相談することができた。親切なサジェスションをもらい、全日本のユニフォームも借りることができた。さらに朝日新聞のスポーツ記者に話を通してくれたため、かなりの数の写真を無料で借りることもできた。

有名選手のサイン集を目玉にと考え、当時始まったばかりの日本リーグの試合前に選手ロッカーに押し入った。古河電工、八幡製鉄、三菱重工、東洋工業、ヤンマーなどからサインをもらうことができた。まだ学生であった釜本邦茂氏がヤンマーのロッカー付近にいたところでサインをもらえた。あのサイン帳はどこへ行ったのだろうか？

弱いは弱いなりにサッカーに関わろうとしていた健気な姿が思い出される。（泰）

1966年の世相

3月　日本の総人口1億人を突破
4月　「文化大革命」紅衛兵旋風
W杯第8回イングランド大会、地元イングランド優勝

中学１年サッカー部VS先生チーム

1968年２月22日卒業式

対県立鎌倉高校練習試合

試合が終わり、先方がタクシーを呼んでくれて帰るはずになっていたのですが、群衆をかき分けていくと、タクシーはすでに誰かに乗って行かれてしまっていました。

市当局が困っていると、そこに、ボルシアの人気エーススストライカーで、その日はけがで欠場したサルーという選手がベンツで通りかかったので、話をしてもらい、家族共々その車で送ってもらうことになりました。今で言えば、丁度試合後に、ゴン中山に送ってもらったようなことなのでしょう。翌日のローカル新聞に、選手の美談として囲みで書かれてしまいました。

日本の国際化と共に我が16期もずいぶん海外に赴任していました。

渡辺君がオランダ、平本君が英国、スペイン、紺野君がイラク、堀君が英国、小生がカナダ、ドイツ、そしてなんと言っても岸田君がドイツに、茂木君がオーストラリアに行きっぱなしです。永住しそうなお二人を除き皆帰ってきました。その間、いつも集まりの幹事役をやってくれていた山田君や前島君を中心に、最近お目にかかれていない人たちにも声をかけて、一献傾け、語り合いたいと思っています。

現役時代から、なかなか自前で11人集めるのが困難だった我が期ですが、自らを「谷間のラーメン屋」と言った、故小渕総理ではありませんが、谷間のチームは谷間のチームらしく、味わいの深い仲間たちでありたいとつくづく思う今日この頃であります。